

第6章 歴史文化の特徴と関連文化財群

1 歴史文化の特徴と関連文化財群

豊かな自然環境に育まれ現在に至る本市の歴史文化の連なりを、歴史的変遷と自然的・文化的特性に分けて概観してきました。本市には数多くの歴史文化資産が息づいています。これらの魅力をより幅広く捉え、総合的・一体的な保存・活用に繋げるために、本市の「歴史文化の特徴」を分析し、「関連文化財群」を設定します。

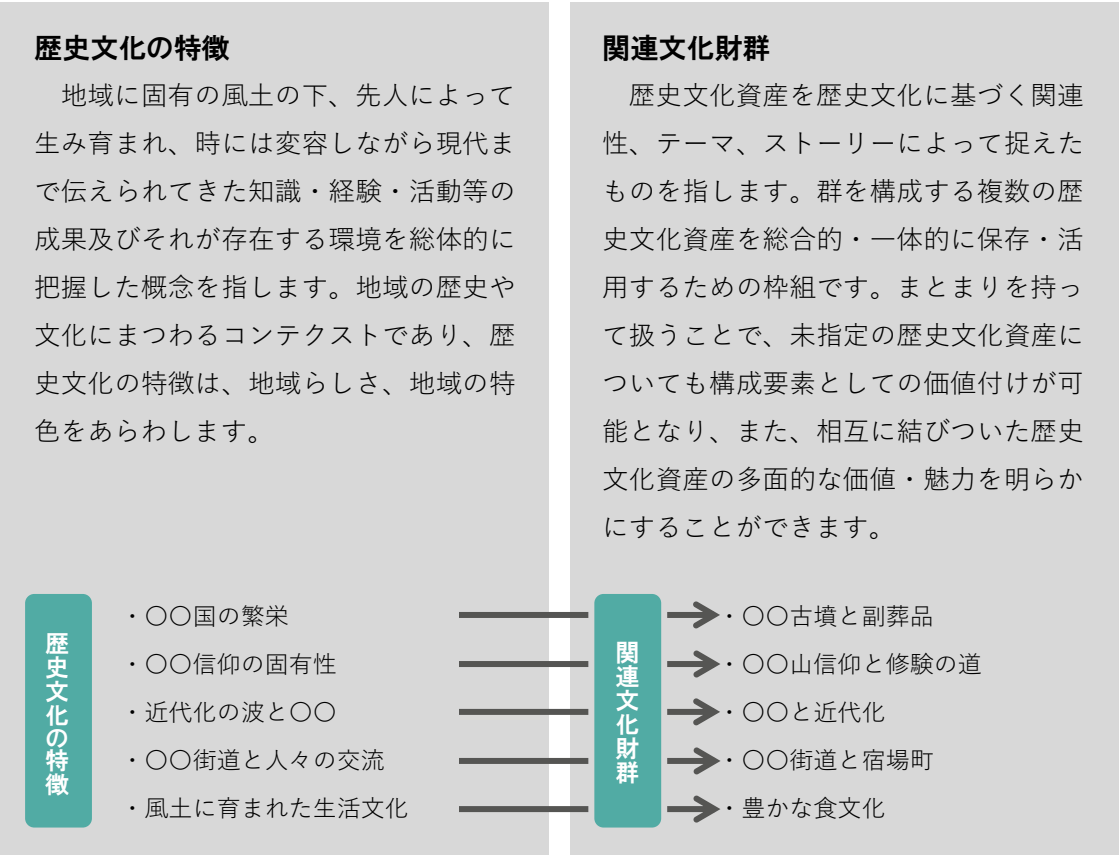


図 6 - 1 歴史文化の特徴と関連文化財群イメージ図

(1)歴史文化の特徴と関連文化財群の整理の方法

以下のような方法で、歴史文化の特徴と関連文化財群を整理します。

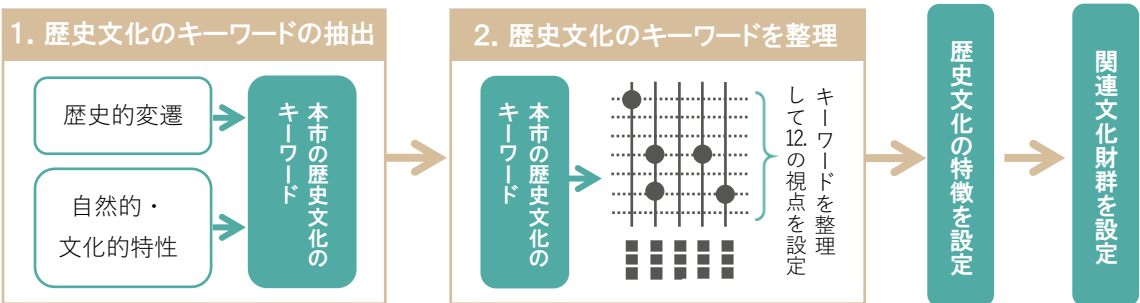


図 6 - 2 整理方法フロー図

(2)歴史文化のキーワードの抽出

歴史的変遷と自然的・文化的特性に分けて概観してきた本市の歴史的・文化的背景を分析し、キーワードを抽出します。

歴史的変遷	内容	キーワード
原始	旧石器・縄文・弥生時代 矢作川流域や山間部に人の営みの痕跡有。矢作川河床遺跡、真宮遺跡など。 古墳時代 甲山第1号墳や和志山古墳造営。群集墳約200基造営（地域の支配者等の墓と推測）。	◆矢作川流域における文化の発祥
古代	飛鳥時代 寺院を造営することが権力誇示の手段に。矢作川右岸に寺院（北野廃寺）が造営される。 奈良時代 律令国家により東海道が整備される。三河国が成立。物部氏との関係性が示唆される。 平安時代 藤原季範が熱田大宮司の地位を得る。物部氏から藤原氏へ勢力交代がなされる。	◆東海道の整備
中世	鎌倉時代 源頼朝が三河国を支配。足利義氏が三河国守護となり大宮司藤原氏から足利氏へ勢力交代。矢作宿が矢作川の渡し場として栄える。親鸞の弟子顕智らが矢作の薬師寺で浄土真宗の念仏布教を行う。 室町時代 南北朝動乱で矢作川の戦いが勃発。三河には將軍直属の奉公衆約40家が所領を持つ。 戦国時代 松平氏が台頭する。蓮如の布教活動が行われる。真宗本願寺派が成立。松平清康が龍頭山の岡崎城へ松平氏の本拠地を移す。西三河に松平庶家の勢力が広がり、三河譜代が成立。勢力拡大と共に各地に寺院を建立。松平氏が衰退するなか岡崎城内で徳川家康公誕生。今川氏による三河支配の後、家康公は今川氏から独立。三河一向一揆を鎮め家康公が三河を平定。	◆源氏・足利氏による三河支配 ◆三河真宗のおこり ◆中世の岡崎の城 ◆松平氏・徳川家の勢力拡大と浄土宗の発展 ◆徳川家康公の誕生と自立 ◆三河一向一揆と家康公の三河平定
近世	安土桃山時代 豊臣家臣田中吉政による城下町整備。 江戸時代前期 前本多家三代による城下町整備（東海道移設、二十七曲り整備）、水野忠善による城下町整備（侍屋敷などの整備）。寺社領や旗本領も多く、水陸交通の発展により宿場町として発展。 江戸時代中期・後期 城下町で産業が発展し、城下町文化が開花。	◆歴代藩主による城下町整備 ◆寺社領や旗本領の多い岡崎 ◆水陸交通と宿場町の発展 ◆岡崎城下町の発展と文化の開花
近代	明治時代 殖産興業推進と鉄道整備（官営愛知紡績所とガラ紡、東海道線敷設等）が進む。	◆殖産興業と産業基盤の拡大
近代	大正・昭和時代（戦前） 愛知電気鉄道が開通するなど公共交通機関が充実。紡績業から製糸業へ転換。市制施行。空襲により中心市街地が焦土と化す。	◆空襲により焦土となった岡崎

歴史的変遷	内容	キーワード
現代	昭和時代(戦後) 戦災復興事業が進む。中核市へ移行。 平成時代 平成の大合併。市制 100 周年を迎える。	◆戦災復興と近代都市成立
自然的・文化的特性	内容	キーワード
自然環境	中心部から北東部の山地は花崗岩類で形成され、南東部の山地は変成岩類からなる。山間部の一部を除き照葉樹林帯に属し、東海丘陵要素植物が湿地に局所的に見られる。	◆花崗岩類や変成岩類を産出 ◆東海丘陵要素植物と湿地
天然記念物	ゲンジボタルや北山湿地などの豊かな水辺空間に生息する天然記念物を有する。県、市指定共に植物の件数が多い他、昆虫類なども指定される。	◆水辺空間に生息する天然記念物
都市構造	豊臣家臣田中吉政による城下町整備後、歴代藩主に城下町整備が引き継がれる。明治期には繊維の町として発展し、市街地が広がる。	◆城下町の成り立ちと都市の構造
用水・耕地	六ツ美地区で占部用水が作られる。明治初期に高橋用水着工。全国的に見ても先駆的な耕地整理を実施。	◆六ツ美地区と用水・耕地整理
街道	交通の要地として主要街道である東海道が整備され、岡崎の発展を支える基盤となる。	◆東海道と岡崎の発展
治水	矢作川は豊臣家臣田中吉政の築堤工事をはじめとする治水事業を経て現在の形になる。天井川化も進み、18 世紀半ば以降洪水が頻繁に起こるようになった。	◆矢作川の治水と洪水
建造物	中世から今に至る様々な建造物が指定されている。松平氏・徳川家ゆかりの社寺が多く存在するほか、石都岡崎を象徴する石造物も文化財指定されている。	◆中世から今に至る本市を象徴する建造物
遺跡	岡崎市域の人々の歩みを示す遺跡や遺物が矢作川流域で確認されている。また、松平氏、徳川家ゆかりの史跡も多く残されている。	◆本市の歴史を紐解く鍵となる遺跡
民俗	田楽や神楽、虫送りなどの祭りや芸能、また東海道などを通して広まった伊勢信仰や秋葉信仰が今も受け継がれ、守り伝えられている。	◆土地に受け継がれる伝承・儀礼
美術工芸	東西の文化の交流点であり、徳川家ゆかりの地であることから地域に古い由緒を持つ有力社寺などに伝えられてきた美術工芸品を多数保有している。	◆東西文化の交流点としての美術工芸
伝統産業	地勢や気候などを背景に、石材加工や八丁味噌製造などの伝統産業が発展してきた。	◆歴史と伝統を今に伝える伝統産業

(3)歴史文化のキーワードの整理

歴史的変遷と自然的・文化的特性より抽出したキーワードを整理し、12の視点にまとめます。

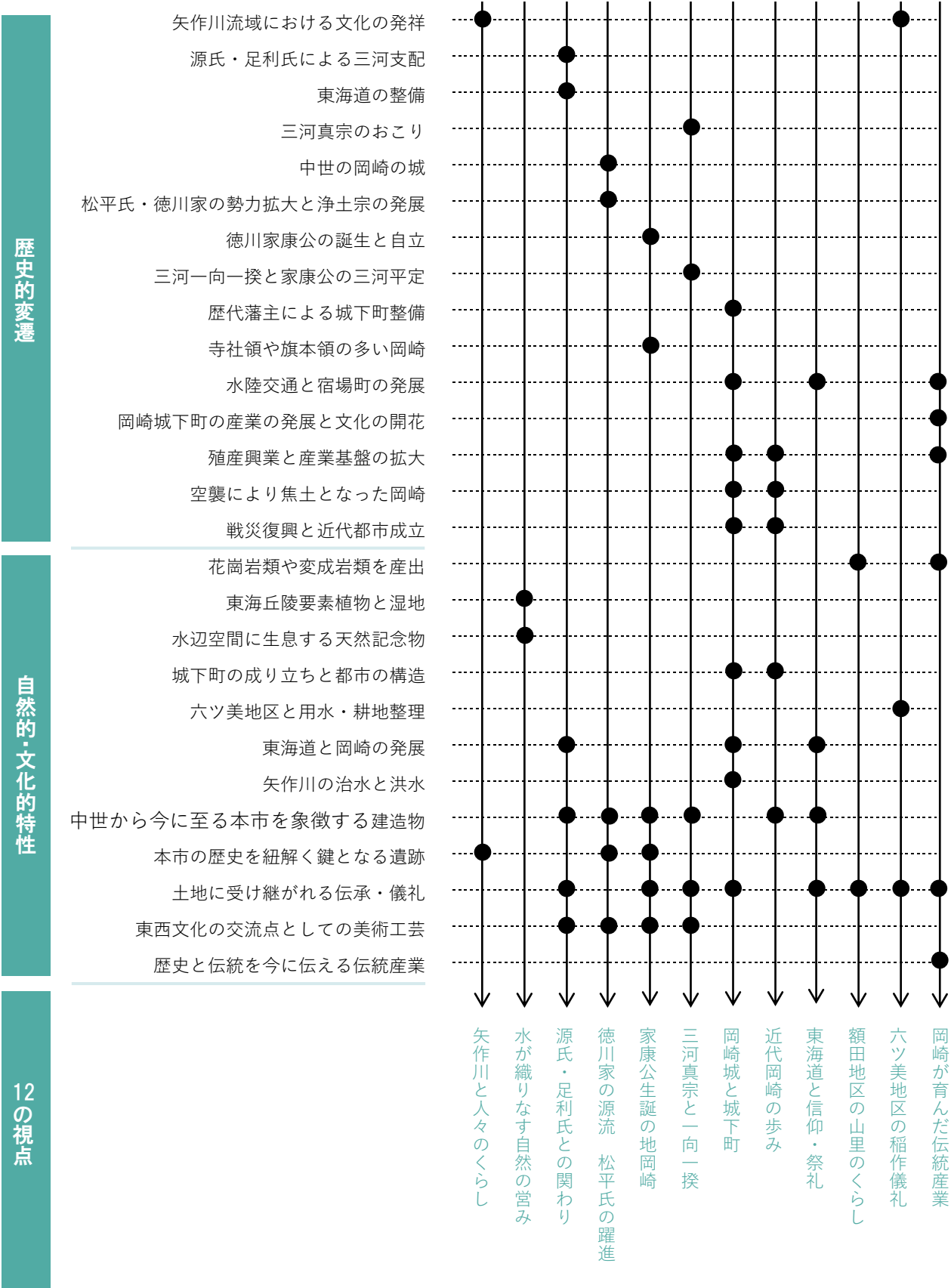


図 6 - 3 歴史文化のキーワードの整理のフロー図

2 岡崎市の歴史文化の特徴と関連文化財群

12 の視点を基に歴史文化の特徴を抽出し、それらを受けて関連文化財群を以下の通り設定します。

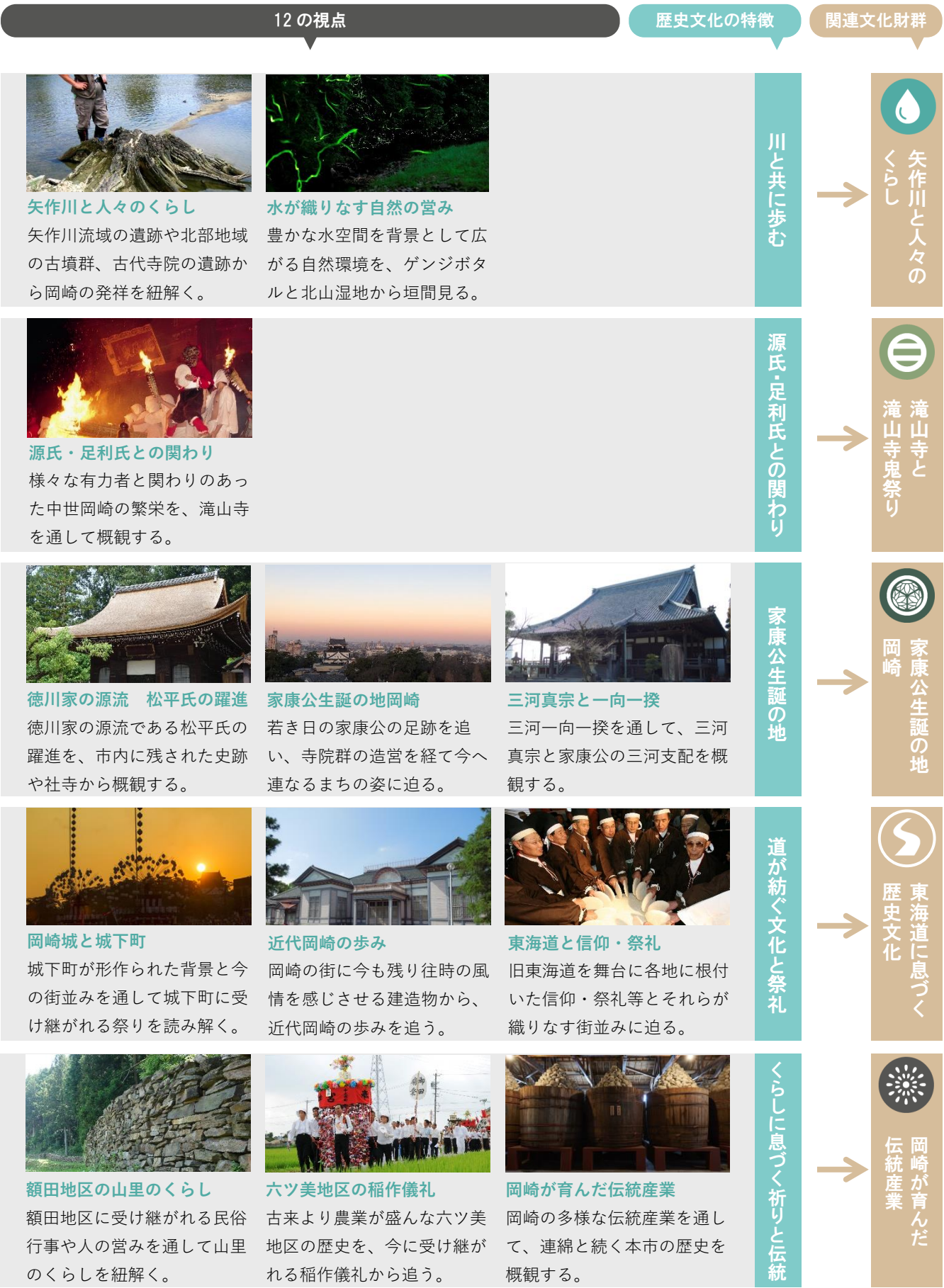


図 6 - 4 歴史文化の特徴と関連文化財群の一覧

(1) 歴史文化の特徴

川と共に歩む

岡崎の地には、矢作川や乙川、男川をはじめとする大小様々な河川が流れています。豊かな水辺空間はホタルが乱舞する清流となり、絶滅危惧種が多く生息する湿地も分布し、多くの人々の憩いの場となっています。川は、古くから人々の生活と深く結びついていました。災害と戦い、治水を行いながら、人々は生きるための水の供給源として、また稲作などの生産手段や物資の運搬手段として川を利用してきました。川と共に歩む岡崎の歴史を、豊かな自然環境と古代の営みの足跡から紐解きます。

矢作川と人々の暮らし

岡崎は早くから人々が住み始めた土地でした。矢作川・乙川などの市域を縦横に貫き、雄大に流れる河川に抱かれて始まった人々の営みを、流域に残された数々の足跡が今に伝えています。



図 6 - 5 矢作川

矢作川と人々の暮らし

矢作川はかつては幾筋にも分流し、上流部より大量の土砂をもたらしながら洪水のたびに流路を変える河川であったと考えられています。その後、中・近世にかけて河川改修が進み、現在の川筋ができあがっていきました。

乱流する矢作川は多くの自然堤防を造り出し、そこが縄文時代以来、人々の生活の場として活用されてきました。そのため、矢作川の周囲には縄文・弥生・古墳の各時代の遺跡が数多く立地しています。矢作川に端を発する人々の暮らしは、やがて縄文時代から中世までの複合遺跡である真宮遺跡や、白鳳時代における西三河地方の中核寺院であったと考えられる北野廃寺の創建へと繋がっていきます。

原始・古代以降も人々の営みに深く根差していた矢作川は、城下町岡崎の繁栄と共に石工業や八丁味噌醸造などの伝統産業を育み、東海道と並ぶ交通の大動脈として機能していきます。陸の東海道と水の矢作川に支えられ、本市は交通の要衝として発展を遂げました。



矢作川河床埋没林
矢作川河床より発見された縄文時代晩期の落葉広葉樹林からなる埋没林。



真宮遺跡
縄文時代晩期の平地式住居と土器棺墓群からなる集落遺跡。鎌倉時代まで続く複合遺跡。



矢作川河床遺跡
縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。郡府墨書土器が出土し、古代の役所があった可能性を示唆する。



北野廃寺跡
白鳳時代前期の寺院跡。高句麗様式の素弁六弁蓮華文という文様の軒丸瓦が出土している。

図 6 - 6～9 矢作川関連遺跡・遺物等写真

矢作川と支流の古墳群

矢作川流域の北部地域には、市内の古墳の約半分が集中しています。その他の古墳群もいずれも乙川や矢作川流域に位置しており、古来より水と人の営みに深い関わりがあったことが分かります。

古墳時代前期の4世紀後半から中期の5世紀初頭に造営された大型古墳の和志山古墳(全長約60メートルの前方後円墳、西本郷町)や甲山第1号墳(直径約60メートルの円墳、前方後円墳説もあり。六供町)は、その規模や立地等から地域を支配した首長の墓であると推察されており、当時、統治社会が形成されていたことを示しています。古墳時代中期の5世紀中頃には、首長の墓はやや小型化し、人物埴輪等が出土した太夫塚古墳(直径36メートルの円墳、若松町)や馬具や圀形埴輪等が出土した経ヶ峰第1号墳(長さ約35メートルの帆立貝形古墳、丸山町)等は河川交通の要所に臨む場所に築られました。

古墳時代後期の6世紀代以降に築造された古墳は群集墳を形成し、市内で約200基を数えます。これらの古墳は、直径10～20メートル程度のもが多く、追葬が可能な横穴式石室を持つことが特徴です。首長墓の中には、神明宮第1号古墳(石室長11.8メートル、丸山町)、岩津第1号古墳(石室長10メートル、岩津町)等の西三河最大規模の横穴式石室をもつ円墳も現れます。先に示した当時の支配者の墓だけでなく、その地域の有力農民やその家族のものもあると推察されています。主な古墳群として、北部地区では巴川左岸から北斗川流域に所在する細川・仁木古墳群(11基)、岩津天満宮周辺の丘陵上に所在する岩津古墳群(6基)、東部地区では乙川中流域右岸に所在する亀山古墳群(5基)や経ヶ峰古墳群(3基)を包括する丸山古墳群、西部地区では碧海台地上に所在する小針古墳群(6基)・宇頭古墳群(16基)、中南部の明大寺丘陵部周辺に所在する外山古墳群(3基)・小豆坂古墳群(6基)等が挙げられます。

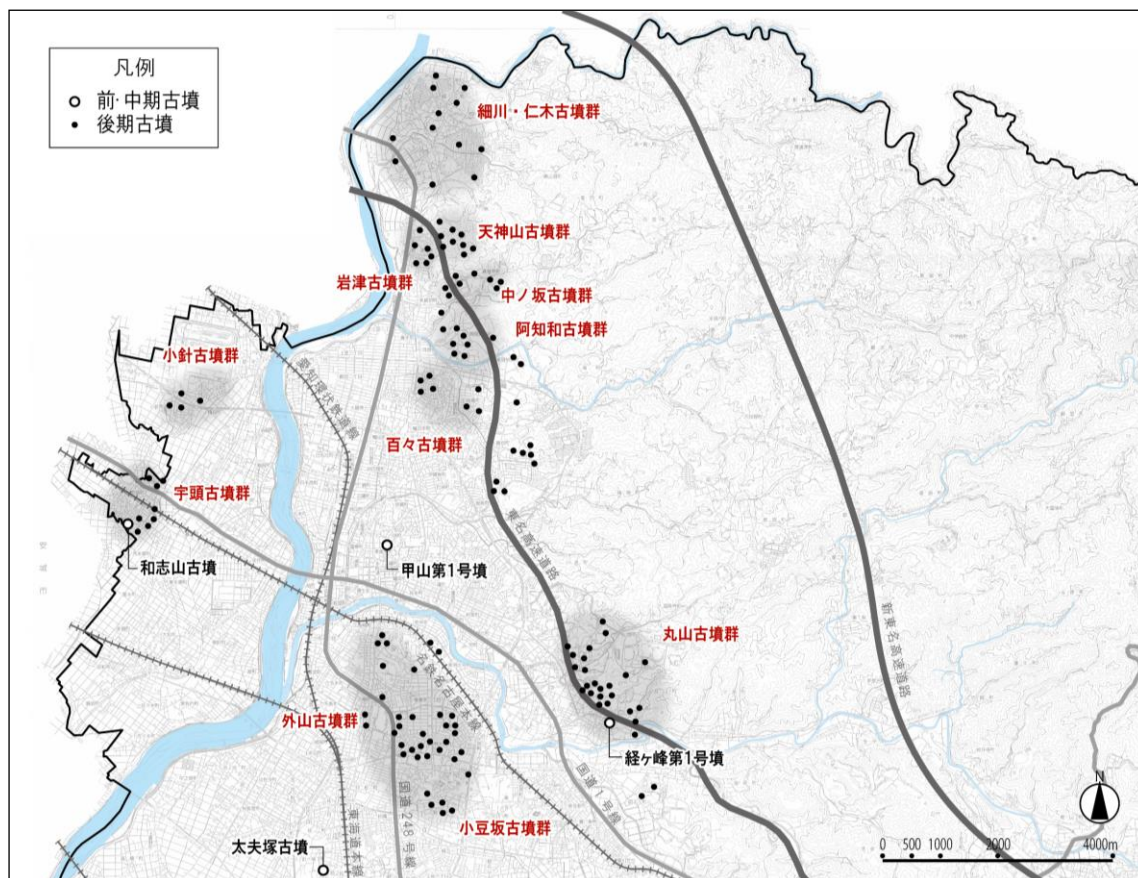


図6-10 矢作川と支流の古墳群分布図

古代寺院の分布

古代寺院と河川にもまた深い関係性がありました。白鳳期の寺院跡である北野廃寺跡や、矢作川に注ぐ支流の青木川沿いの真福寺東谷遺跡などが、川の流れに沿うように造営されていました。

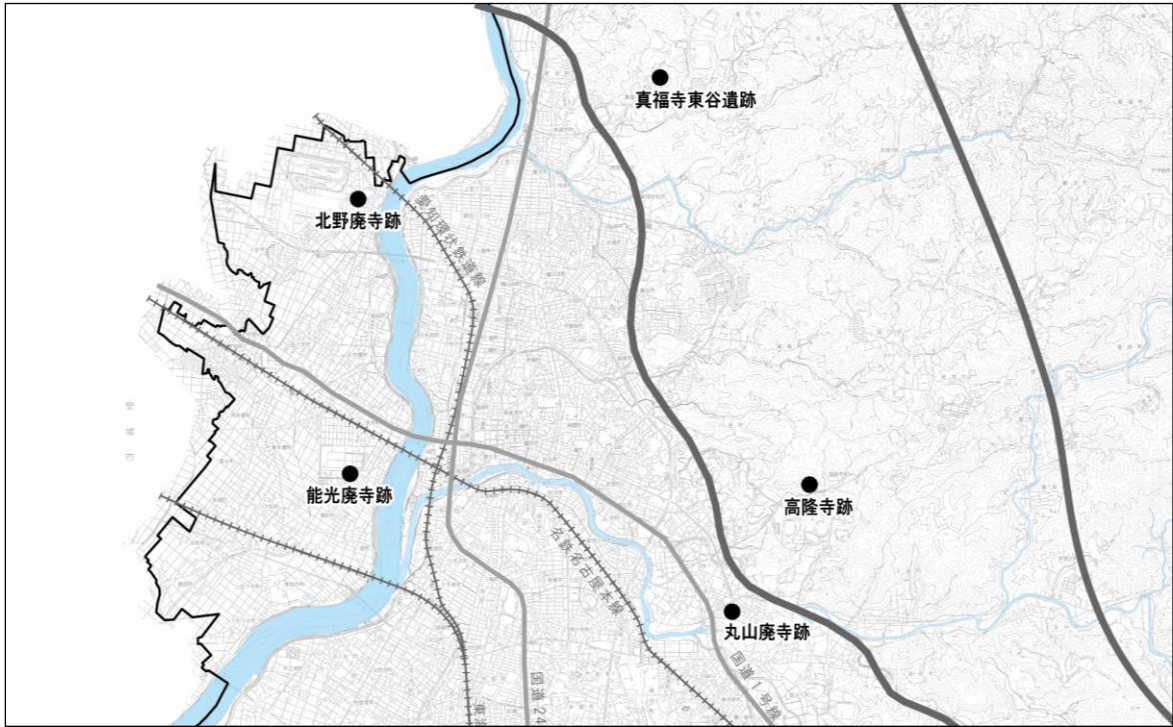


図 6 - 11 矢作川と支流の古代寺院分布図



図 6 - 12 北野廃寺跡の伽藍配置

北野廃寺跡

北野町にあった寺という意味で、正確な寺の名前は伝えられていませんが、白鳳時代前期に建てられた寺院であり、平安時代中期まで栄えていたことが分かっています。寺は中門をくぐると塔がそびえたち、その後ろに金堂、講堂と一直線に並ぶ四天王寺式と呼ばれる伽藍配置で、周囲を土壘が取り囲んでいました。

寺院を建てた人物について具体的な事は判明していませんが、半島渡来の文化、土木建築などの新しい技術を導入するとともに、僧侶を始め多くの人々により寺院を維持する経済力を持った、この地方の中心的な豪族であったと想定され、寺院は矢作川東への渡河点にあたり、矢作川流域の仏教文化の拠点として機能していたと考えられています。

矢作川の舟運

慶長 10 年（1605）に矢作新川ができ、寛永 12 年（1635）に幕府代官の鳥山牛之助・鈴木八右衛門によって河口の鷲塚・平坂の両湊が大浜（碧南市）・犬飼（蒲郡市）・御馬（宝飯郡御津町）の湊とともに三河五箇所湊に指定（「三河国二葉松」）されて以後、矢作川舟運は発達したと考えられます。以来鷲塚・平坂の両湊は矢作川舟運における物資の積出港として賑わいました。

矢作川舟運は、三州中馬及び信州中馬街道の陸運と接続していたことに大きな意味があります。矢作川の河川交通には大きく 3 つのルートがあり、ひとつは矢作川上流の古鼠・越戸（豊田市）まで船で上がり、そこから陸路を北上して中金から飯田街道に入るもの、2 つ目は岡崎で陸揚げし、そこから陸路足助に向かうもの、3 つめは矢作川支流の巴川に入り、九久平で陸揚げし足助街道を経て飯田街道に入るものです。いずれにも陸路からは中馬と呼ばれる馬が利用されて信州方面に物資が運ばれており、矢作川舟運の発展には三州中馬との深い結びつきがありました。

江戸時代に矢作川舟運によって下流からもたらされた上り荷には、塩・鉄・大豆・干魚・醤油・味噌・酢・酒・麦・粕・干鰯・陶器など、信州または奥三河からの下り荷には薪・木材・木炭・竹・刻みたばこ・米・栗・椎茸がありました。岡崎城下では、信州への中継地のひとつとして、物資の陸揚げや積み出しが行われ、こうした物資の陸揚げ等を行う場所を土場と言ひ、市域の矢作川沿いでは合歓木、佐々木、赤渋、福島、新田、八町、上ノ里、岩津の 7 つの土場が賑わっていました。また、矢作川の支流である菅生川沿いには、御用土場、桜馬場土場、満性寺土場の 3 つがあり、岡崎の特産品である石、味噌、大豆、綿作の肥料等が運ばれました。

矢作川舟運は、本市の特産品を生み出す土壌ともなりました。八丁味噌がこの地で産業として発展した要因として、原料の調達・醸造の環境・製品の運輸の面で、味噌造りにとって最適な場所であったことが挙げられます。この地は南北の矢作川の舟運と東西の東海道が交わる水陸交通の要衝であり、江戸時代には矢作川に土場（船着場）、岡崎宿に塩座（塩の専売）が置かれたことから、原料となる大豆や塩を入手しやすく、さらに矢作川の伏流水という良質な湧水や温暖な気候風土など、味噌造りにとって三拍子そろった立地条件でした。

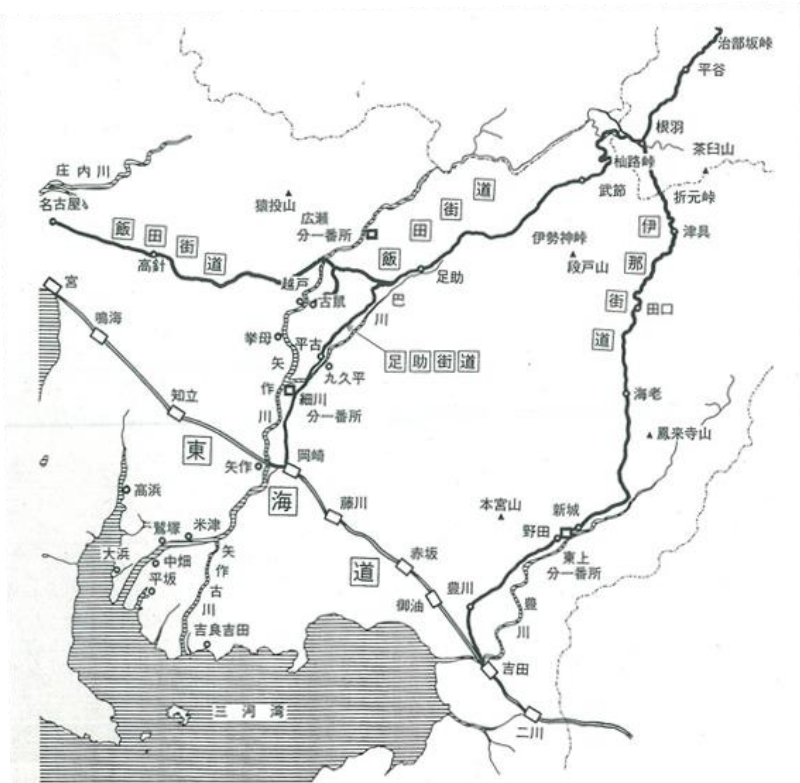


図 6 - 13 矢作川舟運関係図（出典：企画展矢作川一川と人の歴史）



図 6 - 14 八丁味噌蔵

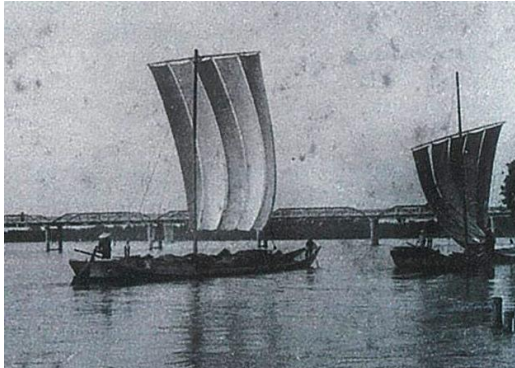


図 6 - 15 矢作川を行き来する帆船（大正中頃）

歴史文化の特徴 川と共に歩む 水が織りなす自然の営み

岡崎の豊かな水辺環境は人々の暮らしの基盤となると共に、様々な生物の営みを支え、緑を育み、水と緑が織りなす本市の美しい景観を形作ってきました。豊富な水がもたらす自然の営みを象徴する天然記念物に、ゲンジボタルと北山湿地が挙げられます。

図 6-16 ホタル

岡崎のホタル

昭和 10 年（1935）、美合地区が「岡崎ゲンジボタル発生地」として国の天然記念物に指定され、昭和 47 年（1972）には河合地区も追加されました。また、市の天然記念物である額田地区の「ゲンジボタル」は昭和 58 年（1983）に指定されています。ゲンジボタルは幼虫時代を水中で過ごし、主にカワニナという水生の巻貝を食べていますが、この貝は、きれいな水がないと生きていけないため、ホタルもきれいな水のある環境が必要となります。美合地区・河合地区・鳥川地区では、住民と地区の学校が協働で、ホタルとともに暮らせる環境を守り続けるために、河川清掃や森林整備などの環境保護活動を行っています。

岡崎ゲンジボタル発生地（須淵町ほか）

指定区域は国道 1 号の大平橋付近から旧額田町までの乙川、男川と山綱川、竜泉寺川、鉢地川、古部川の一部の総延長約 25 km にのびます。都市開発などの影響により生息環境の一部が破壊されその数は減少しましたが、美合地区及び河合地区の保存会、地元の小中学校により保護活動が続けられています。

ゲンジボタル（鳥川町ほか）

額田地区の河川が指定区域となっており、鳥川町では鳥川ホタル保存会により保護活動が続けられています。鳥川町にある岡崎市ホタル学校では、ホタルを通して身近な自然について学ぶことが出来る環境学習のほか、自然観察会や体験活動を開催するなど、自然保護意識の向上に寄与する取り組みを展開しています。



図 6-17 ホタル学校



図 6 - 18 北山湿地

北山湿地

岡崎市内最大の湿地群である北山湿地は、乙川の支流立川の水源
地である池金町東部に位置しています。絶滅危惧種の動植物が多数
生育し、中でもオオミズゴケやヒナノシャクジョウ等の湿地性植物
が豊富な当湿地では、湿地の代表種であるハッチョウトンボやヒメ
タイコウチのほか、ギフチョウが生息するなど、貴重な環境を形作
っています。他にもムラサキミミカキグサ、ハルリンドウ、ナンカ
イワカガミ、コミゾソバが広い範囲で生育し、群落として見るこ
とができます。湿地及びその周辺地域には、ギフチョウの食草であ
るヒメカンアオイが生育するとともに、コパノミツバツツジやヤマ
ザクラなども生育しており、特にヒナノシャクジョウやムラサキミ
ミカキグサは県内でも随一の群落を有しています。北山湿地のよう
な里山を含む湧水湿地では、自然に対する人間のはたらきかけの減
少や湿地そのものの経年変化による湿地消滅を防ぐため、生物多様
性を維持した保全を行うことが重要です。平成 29 年（2017）には
行政と市民と学識者が協働して湿地の保全に取り組むことを目指
し、北山湿地自然環境保護区保全管理計画を策定しました。市民団
体の「おかざき湿地保護の会」を中心に、地元の学校や企業など様々
な主体により保全活動が実施されています。

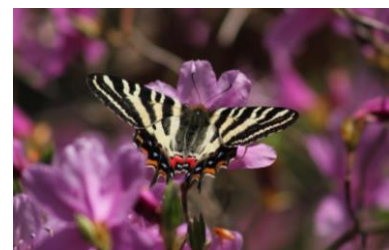


図 6 - 19 ギフチョウ



図 6 - 20 ヒナノシャクジョウ



図 6 - 21 北山湿地保護活動

くらがり溪谷

額田地域の東部三河山地は、美しい山並みと豊かな自然環境を形
成しています。乙川や男川などの支流の河川がつくりだす溪谷や滝
が点在しており、なかでも男川源流のくらがり溪谷は、巨石などの
岩石、瀬と淵をつくり流れる河川、カエデ等の樹木やタニギキョウ、
イワタバコ、ホトトギス等の草花が四季折々の豊かな景観を見せて
います。

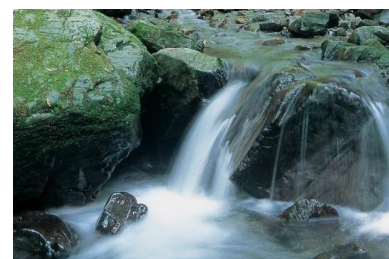


図 6 - 22 くらがり溪谷

源氏・足利氏との関わり

中世岡崎は物部氏や熱田大宮司藤原氏、源氏、足利氏などの有力勢力の重要拠点となり、近世には家康公生誕の地として徳川家と縁深い土地になります。こうした歴史を物語る文物が、岡崎の地には数多く伝えられています。中世岡崎の繁栄と源氏や足利氏との関わり、そしてその地を舞台に行われる祭礼を、滝山寺地区を通して概観します。

歴史文化の特徴 源氏・足利氏との関わり

源氏・足利氏との関わり

古来より交通の要衝にあり、東西文化の交流点でもあった岡崎は物部氏、源氏、足利氏などの有力勢力との関わりが深い土地でした。それを今に伝えるのが、滝山寺とそこを舞台に旧暦正月7日に行われる火振りを特徴とする滝山寺鬼祭りです。



図6-23 滝山寺本堂

中世の岡崎と滝山寺

滝山寺は『瀧山寺縁起』によれば、^{えんのおづぬ}役小角が滝壺から拾い上げた薬師如来を本尊とし、吉祥寺と称して創建され、後に滝山寺に改められたといえます。物部氏、熱田大宮司家、鎌倉幕府、足利氏、徳川幕府と時の権力者により寄進を受け、中世からの重要史料を多く所蔵しています。

滝山寺の位置する滝地区は、矢作川支流の青木川流域にあり、三河山間部の入口にあたります。中世には東海道筋の矢作東宿から足助（豊田市）、信州へと続く街道より分岐し、三河山間部へと至る道筋の重要な場所に位置し、多くの人々、物資、文化の通過点でした。中世以降も松平往還、大沼街道と三河山地奥部へ通じる街道筋にあったため発展し、特に、滝山寺中興の祖仏泉が古代豪族物部氏の加護により堂を築いたとされる頃から発展を始め、中世には熱田大宮司家、源頼朝、足利氏の寄進を受けて最盛期を迎えています。近世には徳川將軍家から朱印地を安堵されたため、滝地区は朱印社寺領地としての景観を成していました。

源頼朝と滝山寺

源頼朝は三河国を政治的・軍事的に重要視し、三河国の守護・地頭に有力な御家人を任命したため、源氏と三河国の武士は古くから強い結びつきを持っていました。源氏と滝山寺の関わりを伝えるものが、源頼朝の従兄である僧寛伝の縁で頼朝の齒と鬢を収めたと『瀧山寺縁起』に記されている、運慶・湛慶作の木造観音菩薩・梵天・帝釈天立像（重要文化財）です。



図6-24 木造観音菩薩・梵天・帝釈天立像

足利尊氏と滝山寺

足利義氏の子孫の尊氏が室町幕府を開くと、三河は幕府の直轄地として更に栄えました。足利氏被官から持仏堂を建てたり田畠を寄進され、本堂・鐘楼・食堂の移築改造や常行堂・延福寺・三十塔婆が建立されたほか、足利義氏の寄進を受けるなど足利氏の庇護のもとに最盛期を迎えた滝山寺は、その権威を補強する寺としてふさわしい構成と規模を誇るようになります。室町時代に入ってから、14世紀後半に足利義満の援助で4度目の本堂の造営があったとされています。



図 6 - 25 滝山寺鬼祭り

滝山寺鬼祭り

滝山寺鬼祭りは旧暦正月 7 日に行われ、五穀豊穡を祈る寺院の正月行事である修正会と、大晦日の夜に悪鬼を払う宮中行事である追儺式^{ついなしき}が変化した鬼祭り、火祭りが一体となった行事とされています。起源は源頼朝の祈願に遡ると伝えられ、室町時代に一度廃絶しましたが、正保 4 年（1647）、3 代将軍家光から滝山寺青龍院の僧亮盛^{りょうせい}が天下泰平祈願を命じられ、徳川幕府の行事として盛大に行われるようになりました。明治 6 年（1873）に休止された後、ガラ紡の経済的繁栄が原動力となり明治 21 年（1888）に再開され、現在も滝町地域住民からなる「滝山寺鬼まつり保存会」により執り行われています。

鬼祭りの主役である鬼面をかぶる冠面者^{かんめんじゃ}は、かつては厄年の男性から選ばれていましたが、現在は、町内在住の希望者から選ばれています。冠面者は厄落としのために 7 日間精進し、寺の草創伝承で役小角が薬師如来を得た「三界の滝」と呼ばれる滝壺で汲んだ水で風呂を沸かし、最後の潔斎をします。祭り当日は、幕府将軍の使者の到着を示す行列が滝山寺三門より本坊へ出立し、冠面者、住職、寺周辺の十二谷からの代表者である十二人衆等が、「瀧山寺鬼祭りの唄」を歌いほら貝の音を谷間に響かせながら、旧街道のまちなみや山峡の青木川沿いを進んでいきます。本坊で十二人衆は祭り専用の献立で供される精進料理の饗応を受け、本堂へと登山します。

滝山寺本堂、滝山東照宮、日吉山王社はひとつの境内に配置されており、中近世の神仏習合の様相と各建物が一体となった景観が祭りの舞台となります。仏前法要、鬼塚供養、庭祭り（田遊び）の後、火祭りが行われ、滝山寺境内の本堂に松明 30 数本を持込んで、半鐘、双盤、太鼓を乱打し、ほら貝が吹き鳴らされる中で祖父面・祖母面・孫面の 3 匹の鬼が乱舞する勇壮な光景が繰り広げられます。はじけ飛ぶ火の粉、鳴り響く音、炎の熱気に包まれて祭りは最高潮を迎え、祭りが終わると見学者が堂内へ一斉に上がり、松明の燃えさしを家内安全の縁起物として持ち帰ります。滝地区ではこの鬼祭りを地域全体で支えており、天下泰平・五穀豊穡を祈り、三河路に春を告げる岡崎を代表する祭りとなっています。

家康公生誕の地

天文11年(1542)、後に日本の歴史を大きく動かす人物が岡崎城内で産声を上げます。江戸幕府を開き、265年の長きにわたり泰平の世を築いた徳川家康公。その原点にして出発点ともいえる生誕地岡崎には、徳川家の源流松平氏ゆかりの文物や、家康公の若き日のエピソード、徳川家ゆかりの社寺などが多く存在しています。

この地より大きな一歩を踏み出した家康公と、後に生誕地として徳川家と深い縁を結び、ゆかりの品々や建造物、祭礼などを多く有することとなった本市の歴史を、今に伝わる歴史文化資産から概観します。

歴史文化の特徴 家康公生誕の地

徳川家の源流 松平氏の躍進

松平氏は、加茂郡松平郷に登場した松平親氏^{ちかうじ}を初代とします。3代信光は「性勇武^{ゆうぶ}にして知略あり」といわれ、西三河に勢力を広げながら松平氏発展の基礎を築き上げました。徳川家の源流にあたる松平氏躍進の背景には、松平一族の根強い基盤や直属の家臣団である譜代衆との強固な絆がありました。

松平氏の発祥と勢力拡大

15世紀前半、加茂郡松平郷（豊田市）から岩津に進出した新興武士松平氏のはじまりについては謎に包まれた部分が多くあります。三河での権力争いは松平2代泰親^{やすちか}、3代信光^{のぶみつ}の時代に始まり、以後6代信忠^{のぶただ}までの間に西三河を中心に繰り広げられて支配を進め、家康公の祖父7代清康が岡崎城に入城しました。

応仁の乱を経て松平氏が三河に台頭する一方、西郷頼嗣^{よりつぐ}は永享年間(1429～1441)に明大寺に屋敷城を築き、享徳元年(1452)～康正元年(1455)に菅生川(乙川)北岸の菅生郷内龍頭山(現岡崎城)に砦を築きます。しかし、頼嗣は松平信光に屈服し、信光は頼嗣と和を結び、子である光重を婿に送り込み、以後、光重が岡崎を支配するようになります。

享禄3年(1530)～4年(1531)には、家康公の祖父松平清康が明大寺の岡崎城から龍頭山の岡崎城へ松平氏の本拠地を移し、西三河において松平庶家が、家督を相続した親長^{ちかなが}の他、岡崎の光重、安城^{ちかた}の親忠^{たけのや}、竹谷^{たけのや}の守家^{もりいえ}、五井^{ただかげ}の忠景^{よふく}、形原^{ちかのり}の与副^{ながか}、長沢^{ながさ}の親則等に分立し、その後、松平4代親忠、5代長親、6代信忠の時には支配地に一族を配置し、松平の勢力を広げていきました。

図6-26 信光明寺観音堂



松平氏ゆかりの社寺と浄土宗

松平氏はその勢力拡大とともに各地に寺院を建立したため、家康公生誕地である岡崎市には特に松平氏・徳川家が創建に関わった社寺が多く存在しています。松平3代信光建立の萬松寺^{ばんしょうじ}、信光明寺、妙心寺(現円福寺)、松平4代親忠建立の大樹寺(松平宗家の菩提寺)、伊賀八幡宮、松平7代清康建立の六所神社、龍海院、家康公建立の松應寺^{しょうおうじ}、随念寺等の社寺には松平氏、徳川家による寄進物も多く、彼らの勢力伸張とともにその寺格を高め、勅願寺となる寺院もありました。また松平氏建立寺院の多くは浄土宗であり、特に信光明寺と大樹寺の建立によって、三河の地に浄土宗が広く普及しその発展につながりました。

松平氏ゆかりの古城

三河の地には松平氏ゆかりの城跡が多く残されています。豊田市松平町、松平氏発祥地の松平郷に位置する松平城や、安城松平家の拠点となった安城市安城町の安城城などと共に、本市にもまた、松平氏躍進の基盤となった城跡が複数存在します。それらから、徳川家の源流・松平氏の足跡を追います。



図6-27 岩津城跡

岩津城跡

岩津町に位置する山城。岩津城東山の山頂に位置し、矢作川中流域の沖積平野を一望することができます。

応永28年(1421)に松平より岩津に進出した松平信光が、父泰親とともに岩津大膳^{だいぜん}を滅ぼして築城したとされ、16世紀当初北条早雲に率いられた今川勢の猛攻にさらされて陥落し、岩津松平家も滅んだと伝えられています。その後の岩津城については不明ですが、清康及び家康公時代にも岡崎城北方の守りとして重要な役割を果たしたと考えられています。

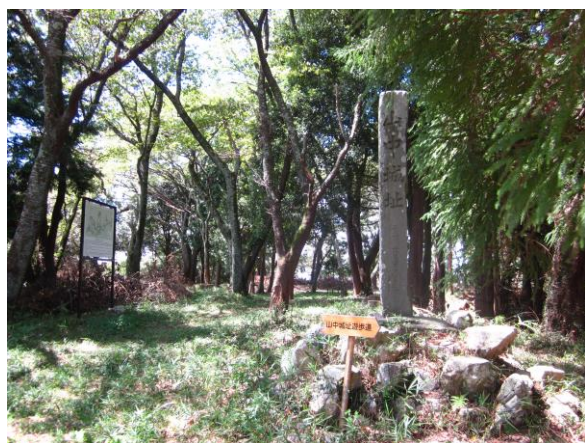


図6-28 山中城跡

山中城跡

羽栗町及び舞木町に位置する山城。東西400m、南北200mで県下最大規模を誇ります。東北眼下に東海道を望み、南には吉良道が通じる交通・軍事上の要衝にあり、岡崎松平氏3代の信貞により築城されたと言われています。信貞は惣領家の安城松平家と対立したために、大永4年(1524)、清康によってこの城は攻略されます。その後、今川義元が西三河を支配する拠点としても大きな役割を果たしたとされ、現在も残る大規模な城郭のつくりは今川氏の改修によるものと推測されています。



図6-29 日近城跡

日近城跡

桜形町に位置する山城。名之内城ともいいます。この城の一帯は日近郷といい、鎌倉時代は三河守護足利氏の根本被官高氏の所領でした。15世紀後半、作手の奥平氏がこの地に進出し、当城を築いたとされています。奥平氏は今川氏に服属していましたが、のちに反したために今川義元の命を受けた松平甚太郎忠茂が弘治2年(1556)に当城を攻めました(日近合戦)。現在、広祥院の裏山山稜に城跡がよく保たれており城域は100m四方ほどあります。

歴史文化の特徴 家康公生誕の地

家康公生誕の地岡崎

岡崎を象徴する戦国武将であり、後に江戸幕府を開き天下泰平の世を築いた人物が徳川家康公です。家康公と岡崎の関わりは、岡崎の象徴ともいえる史跡、岡崎城を舞台に幕を開けます。若き日に動乱の世を駆け抜け、やがて「厭離穢土 欣求浄土」の思いを胸に天下統一を成し遂げる家康公の人生の岐路ともいうべき場面にまつわる文化財や逸話が、生誕地岡崎には残されています。

生誕の地

天文4年(1535)の「守山崩れ」により松平清康を失った松平一族内が対立すると、尾張の織田信秀が三河進出を本格化させます。こうした状況の中、天文11年(1542)に岡崎城内で竹千代(家康公)は誕生しました。6歳から8歳まで織田氏にとらわれの身となり、父広忠が天文18年(1549)に殺されてからは織田氏との人質交換により今川義元の命で駿府へ送られた竹千代は、14歳で元服して元信と名乗り、弘治3年(1557)に義元の姪、瀬名姫(築山殿)を娶ると元康と改名します。桶狭間の戦いで義元が戦死すると、元康は岡崎へ逃げ帰り大樹寺に入り、今川勢が岡崎城から撤退すると帰城しました。永禄4年(1561)に織田と和睦し、西三河南部を支配下とした元康は、翌年信長と同盟を結び、東三河への進出を始めます。永禄6年(1563)、元康は家康に改名し、今川氏からの完全自立を図りました。

同年、一向宗(真宗本願寺派)寺院の不入の権を家康公の家臣が無視したことから三河一向一揆が起こり、翌7年(1564)に一揆を解体した家康公は、三河国統一を目指します。

図6-30 岡崎城復元天守



岡崎城と城下町

岡崎城は松平氏の拠点として西三河支配の中核をなすと共に、後に天下統一を果たす徳川家康公の生誕城として、歴史上重要な一幕の舞台となります。家康公が関東へ移封されてからは豊臣重臣の田中吉政が、江戸時代以降は本多康重をはじめとする譜代大名が歴代岡崎城主として城郭整備を推し進め、今の岡崎城下町の骨格を作っていました。

現在公園となっている岡崎城には、松平氏や家康公が生きた時代に造られ、地下に埋まっている遺構の数々、そして歴代の城主たちが築いた近世以前の遺構がかなり残されていることが、発掘調査の蓄積から浮かび上がってきています。岡崎のまちの成り立ちを解き明かす上で大きな鍵となる岡崎城跡の歴史の解明が、現在も「岡崎城跡整備基本計画」とそれに伴う発掘調査により進められています。

ゆかりの社寺

岡崎のまちには、松平氏・徳川家が創建に関わった社寺が数多く存在します。家康公が天下泰平の世を築くと朱印状が与えられて一層格が高められ、亡くなってからは「東照大権現」として神格化されたことで、生誕地岡崎は聖地となり、顕彰の舞台となる関係社寺は華麗な装いをこらすことになりました。

松平氏・徳川家建立の社寺には松平氏・徳川家による寄進物も多く、岡崎の歴史を語る貴重な歴史文化資産となっているほか、これらを舞台に行われる顕彰活動や年中行事は現在も脈々と市民に受け継がれています。特に、江戸幕府3代将軍徳川家光が「寛永の大造営」で造営した社寺群は徳川家の威容を示すものとして、岡崎のまちに今なお壮麗な姿をとどめています。

寛永の大造営

祖父・家康公への崇敬が特に厚かった家光が江戸幕府3代将軍になると多くの社寺が造られ、先祖の地岡崎でも松平氏・徳川家ゆかりの大樹寺、伊賀八幡宮、六所神社、松應寺で大規模な造営工事が行われ、滝山東照宮が建立されました。

一連の造営は「寛永の大造営」といわれ、生誕地岡崎において家康公の偉業を称える顕彰活動の始まりとなり、まちの歴史の象徴となっています。現存する市指定文化財の建造物に17世紀前半のものが多くはこの大造営のためです。

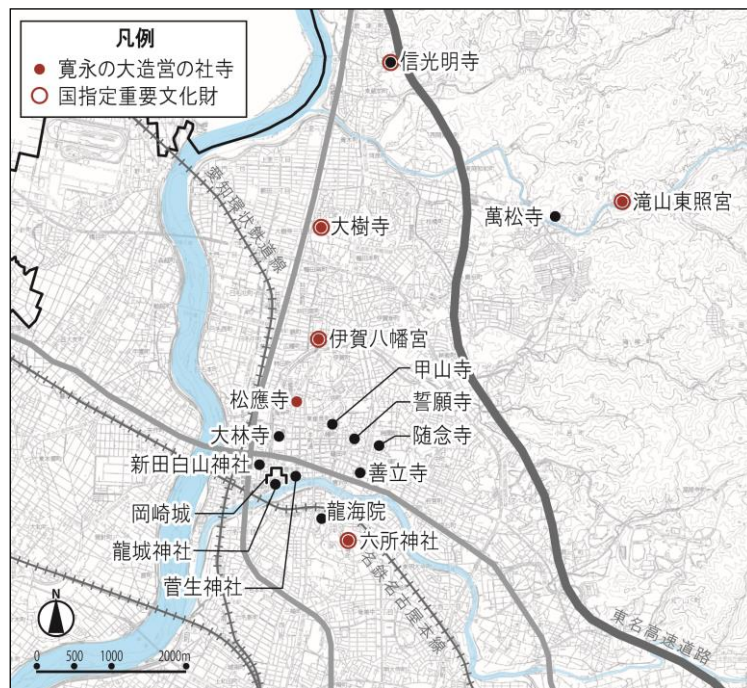


図6-31 松平氏・徳川家ゆかりの社寺等（主に中心市街地）



大樹寺

松平4代親忠創建。家康公が自害を思い留まり再起した寺として知られ、家康公をはじめとする歴代将軍の位牌が安置されています。3代将軍家光が家康公の17回忌にあたる寛永15年（1638）に大造営を命じ、4年をかけて諸堂が新造され、以後ほぼ50年ごとに幕府によって修復がなされてきました。



伊賀八幡宮

正保4年（1647）の縁起では、文明2年（1470）に松平4代親忠が伊賀国から当地へ勧請したとされ、武運長久・子孫繁栄の守護神「氏神」として松平家の崇敬を受けました。永禄9年（1566）に家康公が社殿を造営し、寛永の大造営を経て現在の姿となります。本殿（家康公建立）に幣殿・拝殿を連結した権現造です。



龍城神社

岡崎城旧本丸に位置します。家康公薨去の後、藩主本多忠利がその偉業を称え、寛永年間（1624～43）に城内に東照宮を奉祀したことを創始とし、明和7年（1770）に藩主本多忠^{ただとし}肅が本丸内にあった東照宮を自由参拝できるようにと三の丸に移し、本多忠勝を祀る映生神社を新たに本丸に建てます。明治維新後東照宮と映生神社を合祀して明治9年（1876）龍城神社と改称し、現在地に移転しました。

図6-32～34

松平氏・徳川家ゆかりの社寺

厭離穢土 欣求浄土

永禄3年(1560)、桶狭間の戦いに従軍した家康公は、今川義元の命により織田領へ深く入り込んだ大高城への兵糧の運び込みを成功させます。5月19日早朝には丸根城を攻め落とし、大高城に入った家康公ですが、同日夕方に今川義元が織田信長の急襲を受けて戦死し、今川軍が総崩れとなったことを知ります。

大高城を退き安城松平家の菩提寺大樹寺に入った家康公は、追撃する織田勢に包囲され先祖の墓前で自害しようとしています。しかし、大樹寺の登誉上人に「名将ほど命を重んずるものである」と戒められ、僧衆を集めて戦うことにしました。この時、登誉上人は白木綿の布に墨書した「厭離穢土 欣求浄土」の旗を掲げて戦い、70人力と言われた僧祖洞は総門の門を振って奮戦し敵兵を追い返したといひます。窮地を脱した家康公はこの旗指物を譲り受け、以降「厭離穢土 欣求浄土」の旗をかかげて戦陣に臨んだと伝えられています。



図6-35 大樹寺 本堂

家康公の遺徳を偲ぶ顕彰活動



家康行列

江戸時代に後本多家藩祖本多忠勝を祀る映世神社の例祭として岡崎藩主の指揮のもと行われた行軍儀式が起源とされ、明治9年(1876)に映世神社と家康公を祀る東照宮が合併し龍城神社となると、家康公の命日である4月17日が例祭となりました。戦後一時休止し、岡崎商店街連盟や岡崎商工会議所の支援により「家康祭り」として再開され、現在桜祭りの期間中に実施されています。



御神忌法要・松平八代廟所の清掃活動(大樹寺)

年中行事として家康公の命日に檀信徒や地域住民が本堂に参列し、威徳を称える「御神忌法要」が行われています。薨去300年、350年、400年には大法要が実施されました。また、大樹寺創建の際松平親忠が先祖の墓を移し、家康公が父広忠までの墓を建て再整備した松平八代の廟所が、檀家の清掃活動により大切に守り続けられています。



東照宮本祭・武者的神事(伊賀八幡宮)

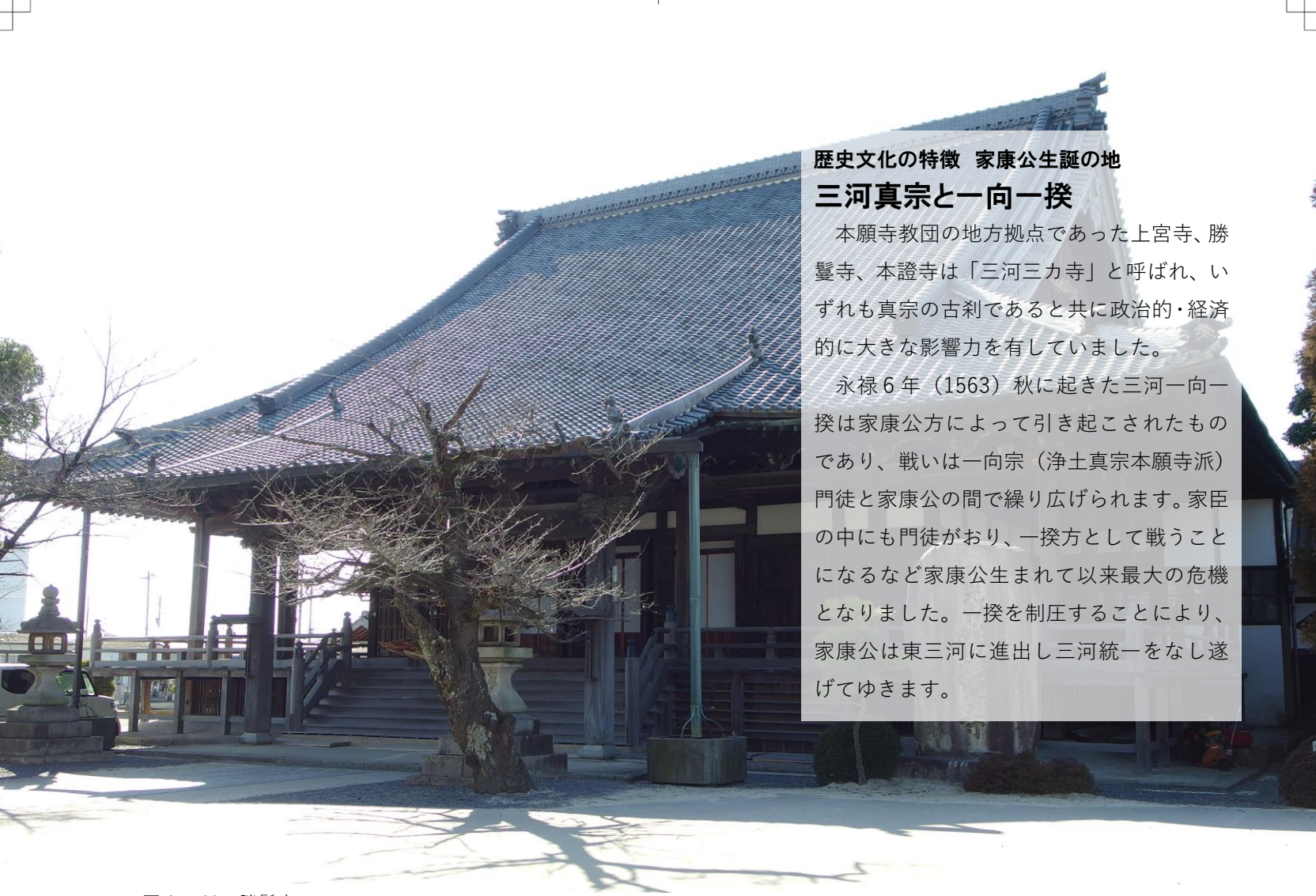
伊賀八幡宮の年中行事として、家康公が亡くなって以降毎年命日に「東照宮本祭」が行われています。薨去300年には三百年祭が執り行われました。また、江戸幕府ゆかりの神事として「武者的神事」が300年以上に渡り受け継がれています。当初は武運を祈る占いだっものが豊凶を占うものになり、結果は江戸城まで早馬で知らせていたと伝えられています。



例祭、降誕祭、神幸祭、提灯行列、兎汁(龍城神社)

龍城神社の年中行事として、家康公が亡くなって以降毎年命日に「例祭」、誕生日に「降誕祭」、4月第1日曜に「神幸祭」が行われています。神幸祭は現在の家康行列の起源とされます。薨去300年、350年、400年には浦安の舞、人長の舞、提灯行列などにより郷土の英雄家康公の遺徳を偲ぶ式典が盛大に行われました。

図6-36~39 顕彰活動



歴史文化の特徴 家康公生誕の地 三河真宗と一向一揆

本願寺教団の地方拠点であった上宮寺、勝鬘寺、本證寺は「三河三カ寺」と呼ばれ、いずれも真宗の古刹であると共に政治的・経済的に大きな影響力を有していました。

永禄6年(1563)秋に起きた三河一向一揆は家康公方によって引き起こされたものであり、戦いは一向宗(浄土真宗本願寺派)門徒と家康公の間で繰り広げられます。家臣の中にも門徒がおり、一揆方として戦うことになるなど家康公生まれて以来最大の危機となりました。一揆を制圧することにより、家康公は東三河に進出し三河統一をなし遂げてゆきます。

図6-40 勝鬘寺

三河本願寺派の成立

15世紀後半、もともと三河には、関東の真宗寺院の影響が強かった五カ寺(上宮寺、妙源寺、満性寺、勝鬘寺、本證寺)があり、それらの寺院が中心となって三河真宗を牽引していました。こうした中、本願寺8世の蓮如は、三河を始め近江や北陸等の地方教団の中心寺院を本願寺派に引き入れることに力を注ぎ、三河真宗教団を分裂させて、上宮寺、勝鬘寺、本證寺の中心寺院とその他の寺院を上宮寺5世・如光の協力により本願寺派に引き入れます。永正7年(1510)頃には土呂(福岡町)の本宗寺は本願寺9世実如の4男・実円が住持となり、一家衆寺院として信者を繋ぐ役割を果たしました。次第に寺内町が形成され、『土呂山畠今昔実録』(明和5年(1768)頃)に東西10町余、南北8町余の範囲に末寺・民家が1,200軒あったと記されるほどの広がりを見せます。

三河三カ寺

中世後期～近世の三河本願寺教団の大坊主勝鬘寺・上宮寺・本證寺の総称を三河三カ寺と呼びます。いずれも13世紀後葉から14世紀後葉の開創で、西三河から尾張西部・美濃西南部・伊勢北部に分布する100以上の末寺・道場を擁しました。15世紀半ばに本願寺蓮如の布教で関東専修寺系から本願寺派に転じ、16世紀には松平氏ら西三河国人から不入を認められた寺内町を形成する一方、本願寺法主の血縁に連なっていきます。一向一揆では各寺内が一揆の拠点となりました。

三河一向一揆

永禄6年(1563)、不入を認められた寺内に対する家康公方の介入と、それに対する寺側の抗議を発端として三河一向一揆が勃発します。一揆の始まりの年や発端となった事件・場所には諸説ありますが、例えば『松平記』は家康公の家臣が一向宗(真宗本願寺派)寺院の外部権力の使者の立ち入りを拒否することができる「不入の権」を無視し、兵糧米を徴収しようとしたことに反発した一向宗門徒(本宗寺、三河三カ寺といわれた上宮寺、勝鬘寺、本證寺)が、三河一向一揆を起こしたと伝えています。

三河では古くから浄土真宗信仰が盛んで、15世紀後半には蓮如上人の布教により本願寺派教団が既に成立し、一向宗の勢力地盤となっていました。家康公の家臣も家康公方と一向宗方で分かれ戦いを繰り広げます。永禄7年(1564)、馬頭原^{ばとうがはら}の戦いにおける和議により、一揆は解体されることとなり、これにより天正11年(1583)までの19年間は三河は真宗禁制の地となりました。その後家康公の伯母妙春尼の働きかけもあり、真宗本願寺派寺院の再興が認められました。

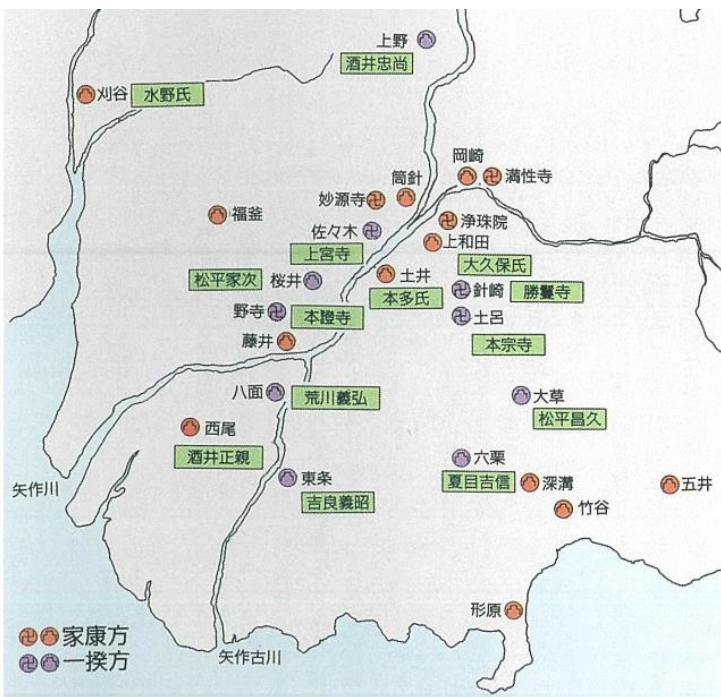


図6-41 一向一揆関係図
(出典：三河武士のやかた家康館 特別展三河一向一揆)

一揆の経過	
永禄六年十月下旬	本證寺境内で岡崎の若侍が鳥井浄心の穀物を狼藉(諸説あり)。
〃 十一月二五日	土呂・針崎の一揆が上和田に押し寄せる。一揆方の本多九郎三郎と大久保七郎右衛門忠世が組み打ち。
永禄七年一月十一日	土呂・針崎一揆が大久保一党の上和田砦に押し寄せ激戦。家康方の鶴殿十郎三郎・宇津与五郎が一揆方の渡辺高綱と蜂屋半之丞に討たれる。渡辺高綱戦死。
〃 一月十二日	土呂・針崎一揆が上和田を攻める。家康上和田にかけつける。家康方の黒田半平が渡辺源蔵と一騎打ち。背後をつかれた一揆が退却するところを水野藤十郎忠重が蜂屋半之丞と鍵を合せる。松平金助が蜂屋に討たれる。
〃 一月十三日	大久保一党が針崎を攻める。一揆方は二手に別れて大久保勢をはさみ撃ちにする計略を立てたが、蜂屋の知らせにより大久保勢は上和田に引く。
〃 一月十四日	家康方の深津九八郎・青山虎之助が上宮寺に忍び入り放火しようとしたが失敗。
〃 一月十五日	佐々木一揆が妙源寺の家康方を攻める。家康矢作川を渡り加勢にかけつける。土呂・針崎一揆が岡崎を目指しているとの報に家康小豆坂に向かい馬頭原で一揆と戦う。
〃 一月二五日	深溝松平の伊忠が六栗城を攻めて夏目吉信を土蔵にとり込める。
〃 二月八日	家康小川の安政で本證寺空誓と戦い、桜井円光寺順正が空誓の身代わりで討ち死に。
〃 二月中旬	蜂屋半之丞が大久保忠佐・忠勝を仲介に家康に和議を申し入れる。
〃 二月二八日	上和田の浄珠院で家康和睦の起請文を一揆方に渡す。石川家成の兵を土呂の寺内に引き入れ、一揆方降伏。

道が紡ぐ文化と祭礼

交通の大動脈として古代より本市を支える東海道は、人や物、文化や信仰の行き交う場として、岡崎のまちの歴史文化に大きな影響を与えてきました。古代から中世にかけて、東海道の宿場として発展した中世都市矢作宿を源流に持つ岡崎は、やがて街道を城下に引き入れ、東西交通の要衝としてさらなる発展を見せます。街道沿いの町々や、城下町を舞台に行われる祭礼や伝統行事、往時の風情を伝える建物の数々は、物流の重要拠点としての岡崎の繁栄と、道が紡ぐ歴史や文化を今に伝えています。

岡崎城と城下町

本市の中心市街地は岡崎城の城下町と東海道岡崎宿が母体となっています。東海道と矢作川水運による物流・交通の要衝として発展し、太平洋戦争の空襲により市街地の大部分が焼失しましたが、復興事業によって現在の市街地の原型が形づくられました。菅生祭、岡崎天満宮例大祭、能見神明宮大祭の「岡崎三大祭」は、江戸時代の町割りの一部や社寺の境内がそのまま残る旧岡崎城下を舞台に、地域の人々が大切に守り続け形を変えつつも毎年行われています。



図 6 - 42 慶長 6 年 (1601) 前後の城下町

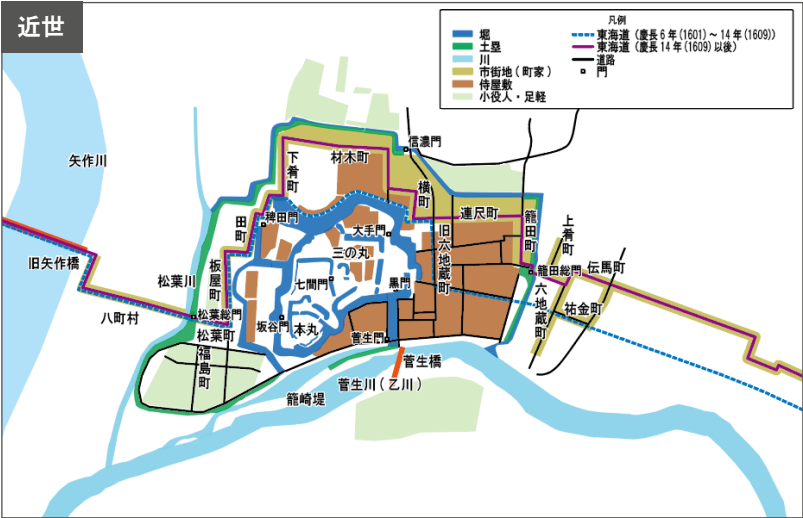


図 6 - 43 正保 2 年 (1645) 頃の城下町



図 6 - 44 明治 26 年 (1893) 頃の市街地

中世末期～近世初期の城下町

豊臣家臣、田中吉政により城郭及び城下町の整備、矢作川堤の大土木工事が行われました。城下町全体を取り囲む堀と土塁を築き総構え（総曲輪）を構築し、城下へ街道を引き入れ「城下道」としました。

近世の城下町

田中吉政による岡崎城下の整備はその後の藩主に引き継がれ、徐々に城下町が形成されていきました。城下町の形成と共に整備された東海道の屈曲した形状は、現在も「東海道二十七曲り」と呼ばれています。

近代の市街地

紡績業が発達し繊維の町として発展しました。堀や土塁が除かれ、旧足助街道や東海道沿いに市街地が広がっていきました。

空襲による市街地の被害

空襲は岡崎の市街地に甚大な被害をもたらし、当時の市内全戸数の 3 分の 1 以上の建物が焼失しました。

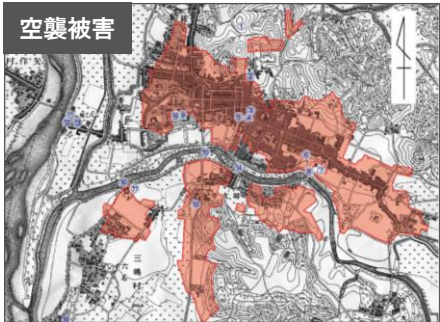


図 6 - 45 戦災範囲

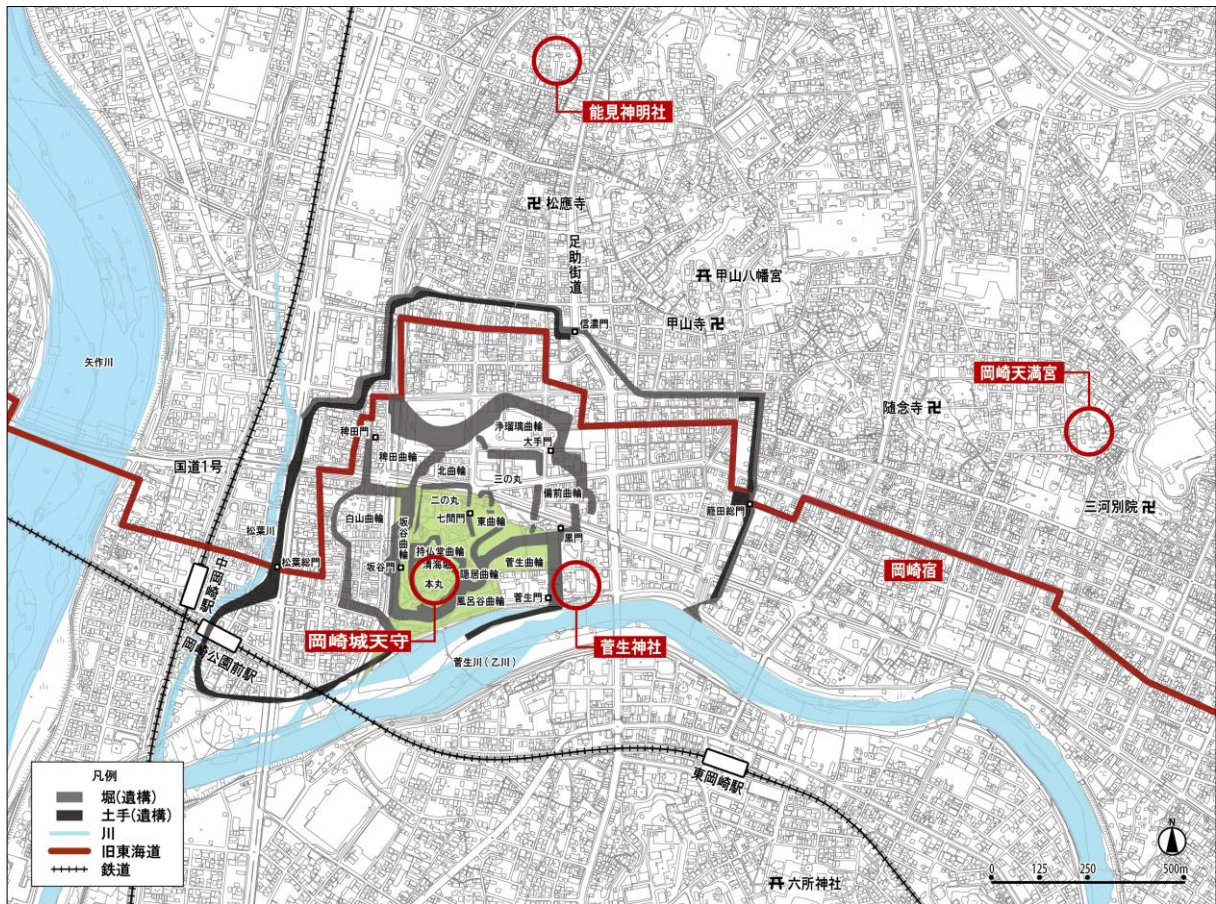


図 6-46 岡崎城下と関連社寺等の位置図

岡崎城下の祭り

交通の要衝として栄えた岡崎城下では祭礼行事が華やかに行われました。城下の主要な祭りとしては菅生天王社（現菅生神社）、北野天神（現岡崎天満宮）、能見神明宮の三大祭りが有名で、それぞれの氏子が競って祭りを盛り上げました。今も城下町を舞台に行われる祭礼は、岡崎のまちの華として大切に受け継がれています。



菅生祭

厄災除去を祈願した祭礼。宝暦 8 年（1758）の『菅生天王宮年中行事』に記述がみられ、後に天王祭りの影響などを受け今の形になったと考えられます。氏子衆による練り込み行列や船魂祭、鉾船神事（神葎流し）の後神前で奉納手筒花火が行われ、文政元年（1804）藩主上覧の花火大会が行われて以降夏の風物詩となっています。



岡崎天満宮例大祭

東海道岡崎宿の総鎮守として崇敬を受けた岡崎天満宮では、城下の大半を占める氏子により盛大な祭礼が行われてきました。旧東海道を舞台とした氏子衆による練り込み行列が、歴史と伝統を今に伝えています。江戸時代「菅生さんの川花火、天神さんの丘花火」と呼ばれた奉納花火は現在規模を縮小して天満宮で上げられ、往時を感じさせる光景となっています。



能見神明宮大祭

能見神明宮大祭の起源は少なくとも江戸時代中期にさかのぼります。幕末には材木町東部の氏子が中心になって山車や花笠を祭りに用いるようになり、明治 33 年（1900）の神輿曳き廻しを経て現在の祭りの形へと変わっていきました。勇壮な山車の曳き廻しと平安絵巻のような御神輿渡御が大祭の象徴的行事であり、祭りのクライマックスの「山車宮入り」の奉納の舞を経て祭りは最高潮に達します。

図 6-47～49 岡崎城下祭礼

歴史文化の特徴 道が紡ぐ文化と祭礼 近代岡崎の歩み

岡崎の街には、近代の風情を感じさせる建造物が今も残っています。これらの建造物には近代の岡崎を生きた人々の様々な物語が込められており、近代岡崎の歩みを辿ることができます。



図 6 - 50 旧額田郡公会堂及物産陳列所

明治時代

明治 4 年（1871）7 月、明治政府による廃藩置県により岡崎藩は岡崎県となります。同年（1871）11 月に三河各県と尾張知多郡が統合されて額田県となり、県庁が岡崎城内に置かれます。しかし明治 5 年（1872）11 月には愛知県に統合され、額田県は 1 年ほどで廃止されました。

江戸時代から綿の生産地として有名であった岡崎では、明治時代になって発明された水車等を動力とする「ガラ紡」という綿紡機が、この地域の流れの速い川で利用できたため普及しました。それと並行して明治政府が殖産興業の政策として「官営愛知紡績所」を設置したことから紡績業が発達し、繊維の町として発展を辿る事となります。一方、明治 21 年（1888）には東海道本線岡崎駅が開業し、岡崎の物資が鉄道を利用して運ばれるようになり、市内の産業は一層の隆盛をみました。明治 31 年（1898）、岡崎駅と市街地を結ぶ岡崎馬車鉄道が開通し、同 44 年（1911）には岡崎・西尾方面への重要な交通機関となる西三軌道株式会社が開業することとなります。

大正時代

明治末期、町村合併を繰り返してきた岡崎町は、当時愛知県内で人口が最も大きな町となっていました。大正 5 年（1916）7 月 1 日、岡崎町は岡崎市となり、愛知県では名古屋市、豊橋市に次いで 3 番目、全国では 67 番目の市制施行を果たします。大正末期には愛知電気軌道（後の名古屋鉄道）の開通や岡崎電気軌道（路面電車）の軌道延長など公共交通が充実し、これまで成長を見せていた紡績業（ガラ紡）から製糸業への転換、農村部から都市部への人口流入等により、近代的な公園や病院が整備され様相が大きく変化しました。



図 6 - 51 ガラ紡績遺構

ガラ紡工場の水車 （桜井寺町）

ガラ紡は水車を動力源とし、水量が豊富な青木川や乙川沿いの地域で発展した。現在も水車や堰堤の遺構が残り、往時の様子を伝えている。



図 6 - 52 官営愛知紡績所余水路遺構

官営愛知紡績所余水路遺構 （大平町）

明治 14 年（1881）建設。明治 29 年（1896）に工場は焼失したが焼失を免れた一部施設は引き継がれた。現在は工場の水車の動力系統が点々と残っている。



図 6 - 53 殿橋

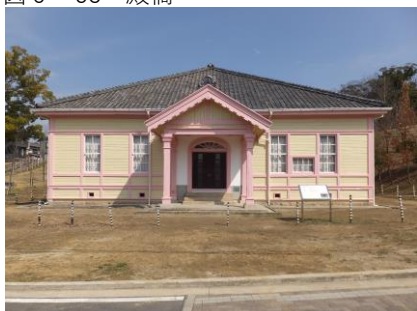


図 6 - 54 旧愛知県第二尋常中学校講堂



図 6 - 55 旧額田郡公会堂及物産陳列所

殿橋

江戸時代に初めて架橋され、殿様が築いた橋だから殿橋と呼ばれるようになったと伝えられています。明治 40 年（1907）には馬車鉄道が、大正元年（1912）には電気鉄道が橋上を通り、現橋は昭和 2 年（1927）建設のものです。

旧愛知県第二尋常中学校講堂

愛知県で 2 番目に設置された中等学校の講堂です。明治 30 年（1897）に竣工し、大正 14 年（1925）に現在の位置へ移築され、西洋古典建築の特徴と格天井（ごうてんじょう）など日本建築の要素を取り入れており、当時の講堂のあり方をよく示しています。市内に唯一残る明治時代の公共的建物であり、国内に残る中等教育機関の独立した講堂として最古の建造物です。

旧額田郡公会堂及物産陳列所

大正 2 年（1913）建設。大正 5 年（1916）の市制施行に伴い、額田郡から岡崎市に譲渡されました。公会堂（写真）は額田郡会議事堂をはじめ各種会合に用いられ、戦前には徴兵場としても使われました。物産陳列所では特産品等の展示・陳列・販売が行われ、本市殖産振興の拠点として活躍しました。昭和 44 年（1969）からは郷土資料を展示・収蔵する郷土館として使用されました。

昭和時代

明治時代以降、欧米列強に並ぶため殖産興業等の近代化が推し進められ、岡崎も様々な産業で発展を見せましたが、大正末期から昭和初期にかけて、日本は深刻な不況に見舞われます。特に、昭和 4 年（1929）に起こった世界恐慌は、木綿、生糸、米などの価格を下げ、岡崎の経済も大きな影響を受けました。昭和 16 年（1941）に日本のハワイ真珠湾攻撃により始まった太平洋戦争は、昭和 18 年（1943）を境に戦況が悪化し、昭和 20 年（1945）7 月 19 日から 20 日にかけて行われたアメリカ軍の B 29 爆撃機による焼夷弾を中心とした 12,000 発以上の爆撃は、連尺町、康生町等の市中心部の近世以来続いた城下町を一瞬にして焦土としました。

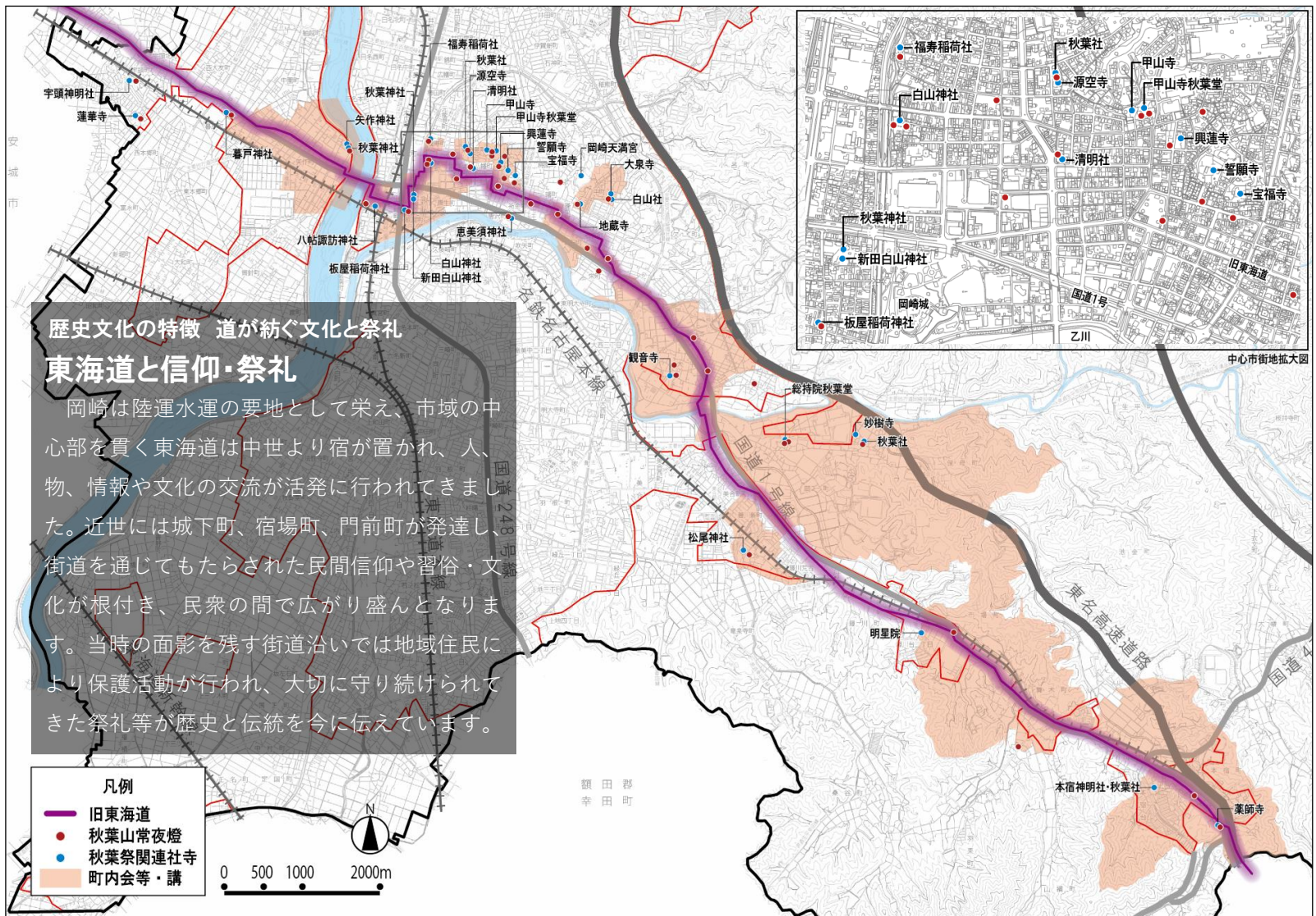
戦後、戦災復興事業の一環で土地区画整理事業が進められ、現在の本市における中心市街地の原形が形づくられます。昭和 30 年（1955）、町村合併促進法を受けて、岡崎市は矢作町をはじめとする 2 町 6 村を編入し、昭和 37 年（1962）には六ツ美町を編入しました。これらの合併とその後の経済成長は、戦争によって失われた岡崎の繁栄を蘇らせるとともに、戦後の西三河の中心地としての岡崎市の地位を確立させていきます。



図 6 - 56 旧本宿村役場

旧本宿村役場

3 代目の村役場として、昭和 9 年（1934）に建設されました。外観は装飾レリーフや柱のデザインで華やかな正面性が強調され、内部は柱にセセッション的な彫りが施され、天井の高い諸室と相まって、当時としてはモダンな雰囲気の建物でした。



秋葉信仰

東海道は交通の大動脈であるとともに、文化や信仰の交流点でした。江戸時代には街道を通じて様々な民間信仰がもたらされます。そのうちの 하나가、三河地域で「火伏の神」として広まった秋葉信仰です。講が結成され、秋葉山遥拝のため東海道沿いに常夜燈が建てられ、各地の秋葉社や常夜燈で秋葉祭が催されました。これらの信仰は今なお受け継がれています。

多くは秋葉祭と呼ばれる秋葉信仰の祭礼では、各町内会・講等で年に1度、代表者が代参し受けてきた御札を秋葉山常夜燈や秋葉社へ納め、町の人々が集まり僧侶・神主の祈祷を受け、各戸へ御札を配布します。あるいは寺院の秋葉堂において秋葉山大祭として、修験者三尺坊の命日にあたる11月16日又はその前後の日に祈祷や火渡りを行います。また、常夜燈「灯明番」として、毎日順番で火を灯すことを行っている地域もあります。

市内の東海道沿いにはこれらの風習や祭礼が秋葉山常夜燈や社寺を舞台に各町内会等・講に連綿と受け継がれており、江戸時代以来の防火と地域の安全を祈る行事が毎年行われています。



図 6-58 御旗公園常夜燈

東海道沿いの主な祭礼

古来より人々の往来の多かった東海道では、古くから道沿いに集落ができ、社寺が建ち、祭礼が行われてきました。そして人々の往来が積み重ねられ、様々な文化が伝えられ地元の祭礼と融合し、今に伝えられています。

東海道東の本宿神明社の祭礼と西の矢作神社の祭礼では、神輿や華麗な彫刻で飾られた山車が巡行し、津島神社の天王祭りは夏病み防止と虫送りを願う^{かんとう}竿燈が町内を巡ります。山中八幡宮に古くから伝わるお田植え神事であるデンデンガッサリは、天候の恵みと稲の豊作を祈願する祭礼であり、苗に見なした餅を大鏡餅に植える所作や豊作を表す大鏡餅を牛の背に載せ、牛が重さに耐えきれず倒れる所作が特徴的です。



図 6 - 59 本宿神明社山車巡行



図 6 - 60 矢作神社山車巡行



図 6 - 61 津島神社の竿燈行列の巡行



図 6 - 62 山中八幡宮 デンデンガッサリ「稲刈り」の所作

東海道沿いの歴史と伝統に関わる人々の活動

東海道沿いには本市の歴史を物語る多くの歴史文化資産が息づいており、これらの資産を大切に守り伝えるため様々な活動が行われています。



図6-63 藤川の松並木

藤川宿と松並木

慶長9年（1604）に江戸幕府によって五街道の制が定められ、江戸日本橋から京都まで東海道五十三次が整えられました。東海道の街道沿いには松が植えられ、現在も藤川宿の西方、字一里山から字北荒子にかけて、長さ約1kmの間にクロマツが立ち並んでいます。昭和38年（1963）ごろから藤川の老人クラブや地域のまちづくりを行う有志の手で保護されている松並木は、最近では藤花荘（障がい者支援施設）利用者の協力で熱心に清掃活動が行われており、今も街道に往時の旅の風情を漂わせています。

旧東海道沿いにおけるまちづくり活動

東海道沿いの宿場町は大いに栄えその賑わいを今に伝える町家や陣屋などが現在も街道沿いに歴史と風格ある景観を形作っています。また、街道を通じて各地へ広まった名産が現在に伝わっており、これらを活用した活動が盛んにおこなわれ、まちの活性化の鍵となっています。

藤川宿では藤川まちづくり協議会が主体となり、松尾芭蕉が「ここも三河 むらさき麦のかきつばた」と詠んだむらさき麦の栽培や商品化、地域の小学校や大学と連携した歴史文化資産を活用したまちづくりなどによる宿場町の歴史文化資産の保存・活用・継承の取り組みを行っています。

本宿では代官屋敷の旧母屋と土蔵を改修したレストランと古文書等の展示室がオープンし、積極的な活用が図られているほか、旧本宿村役場を復原し、地域の歴史を伝える資料館として活用する動きがあります。

大平町は、東海道沿いでは市内唯一現存する一里塚があり、国指定史跡となっています。また、江戸時代、大岡裁きで著名な大岡越前守忠相が大名となり治めた西大平藩の陣屋跡があり、地元史跡保存会により保存・活用が行われています。



図6-64 むらさき麦の麦畑



図6-65 大平一里塚

くらしに息づく祈りと伝統

市域東部、三河高原西端の額田地区は緑豊かな山々が連なり、乙川や男川の流れ下る溪谷沿いに集落が点在しています。水の流れはやがて矢作川に至り、その氾濫原である六ツ美地区は古くから農業が盛んな地区として栄えました。本市の起伏に富んだ地形が育んだくらしに息づく祭礼や伝統行事と、気候風土や歴史が生み出した伝統的地場産業の数々から、人々の営みが織りなす本市固有の歴史と文化に迫ります。

額田地区の山里のくらし

額田地区は急峻な山林の間に位置し、山間部に通じる街道により岡崎市街等とも関わりながら特有の文化を育んできました。北部の乙川水系は花崗岩帯で耕地が得やすく、南部の男川水系は領家変成岩類でV字谷の斜面を棚田として利用してきました。旧石器時代や縄文時代から人々のくらしが営まれ、中世は足利一族の勢力、戦国時代は日近城を拠点とした奥平氏、近世は約 50 か村に分かれ、幕府領、大名領、旗本領、社寺領が入り組んでいた額田地区では、社寺や集落を舞台に自然条件に適した個性ある民俗行事等が行われています。

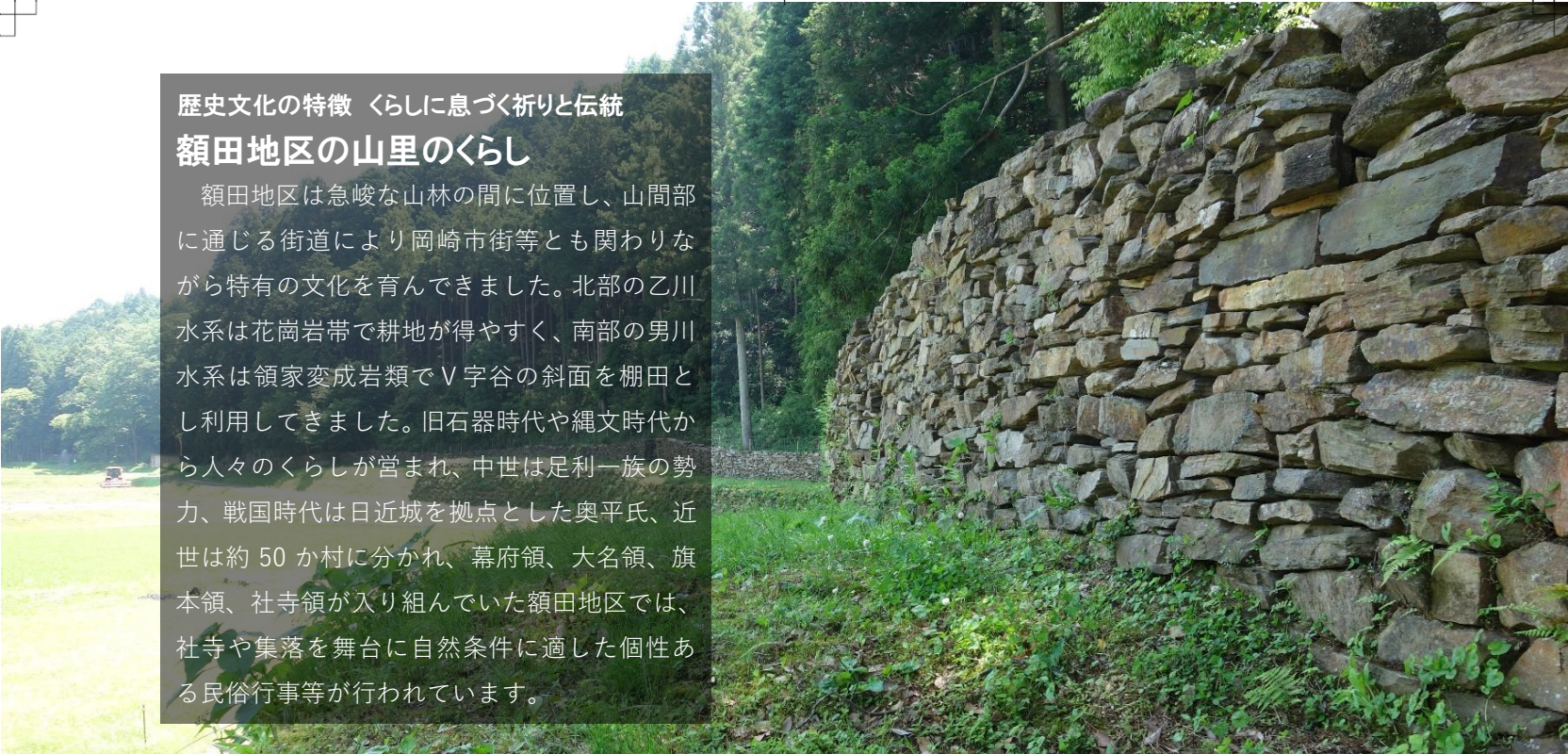


図 6 - 66 万足平の猪垣



図 6 - 67 千万町の女（嫁）獅子神楽

ぜまんぢよう 千万町の女(嫁)獅子神楽

八劔神社で4月第3日曜日の春祭りに豊作と悪魔祓いの願いを込め奉納される獅子舞神楽で、獅子の頭と女物の着物を身につけた舞方が舞うことから嫁（女）獅子神楽とも呼ばれ、その起源は歌舞伎を取り入れた獅子芝居とされます。弓射が祭礼の重要な役割を担い、^{きんてきちゅう}金的 中 の後若宮社への神輿渡御が行われ、若宮社南の広場で舞が奉納されます。



図 6 - 68 須賀神社の祭礼山車及び
祭りばやし

すが 須賀神社の祭礼山車と祭りばやし

かつては「祇園祭」として6月に行われ、今は4月第2日曜日に行われる祭礼で、綱を氏子総出で曳く様子から、「^{ありこ}蟻子祭り」とも呼ばれていました。山車4台と花車（チャラボコ）に続き、提灯、幟等のお手道具と神輿の行列が榎山町内の神明宮までまち中を巡行します。祭り囃子の伝承には、それぞれの組が工夫・努力をし、年番の組による「御照覧」は囃子を神に奉納するだけでなく、囃子の型を守り伝える意味もあります。



図 6 - 69 夏山八幡宮の火祭り

夏山八幡宮の火祭り

旧暦9月9日近くの土曜日に行われ、夏山町の柿平・平針地区が1年ごとに当番となり祭りを執行しています。祭り当日、神社境内の林から伐採した生木を高さ3メートル程積み上げて「ソダ山」を築き、「太夫」と呼ばれる鬼が、拝殿前で熾した神火で火をつけます。鬼と鬼の師匠「ババ」が様々な所作事を行った後、ソダ山から燃え木を持って境内の参拝者を追いかけて回し、火の粉にあたると風邪をひかないといわれています。



図6-70 大代町のオカタ送り



図6-71 オトウダイコンの準備



図6-72 大根舟・甘酒・シロジロ

図6-73 石積み講習会
(万足平を考える会)

コト八日行事

大代町と雨山町では田畑仕事開始の際、2月8日のコト八日行事、「オカタ送り」が行われます。悪霊を3体の藁人形(殿様・姫・下郎)に憑依させ、子どもが「2月8日のコトハジメ」と唱え、鉦や太鼓を鳴らしながら集落境まで人形を送ります。

とうや 当(頭)屋祭祀

当(頭)屋とは、神社の祭りや講等に際し、神事や行事の世話をする人、またそのイエのことをいいます。当(頭)屋が重要な役割を担って神社の祭祀が行われるため、当(頭)屋祭祀と呼称します。

宮崎神社の「オトウの神事」(オトウダイコン)は、奥平氏が武田氏と戦った滝山合戦(天正元年(1573))の戦勝祝いに端を発すると伝えられ、明見町の行事として旧暦11月1日に行われます。神事は当屋制をとっており、200本以上のオトウダイコン(大根の味噌煮)と神饌のオシロジロを準備し、神迎えを行います。石座神社の「神迎え神事」アマザケトウは、オトウダイコンの神事の1週間後に行われます。神饌のシロジロと大根舟に白神酒(甘酒)と祭礼の準備を行い、神事を行います。

まんぞくだいら ししがき 万足平の猪垣

猪垣は猪・鹿が田畑に侵入するのを防ぐ目的で江戸時代中期から築かれてきました。この地域一帯で採取される領家片麻岩を利用し、築造方法にはいくつかの形態・様式が確認されています。総延長は50キロメートル以上とも推計され、全国的にも貴重な存在といえます。万足平の猪垣はその代表例で文化2年(1805)と天保3年(1832)の2度にわたり築かれたという文献が残されています。現在も「万足平を考える会」により大切に保存・活用が図られています。

炭焼き

額田地区では、夏は田畑の耕作と蚕を飼い、農閑期には炭焼きを行っていました。主に土窯で作られる黒炭と、^{ひがま}日窯で作られる^{しろずみ}白炭を焼き、焼きあがった炭を窯の奥から^{すみかき}掻き出す際に用いる^{すみきり}炭掻や、炭焼窯に使用する鉄製の柄振である「掻き出し柄振」、炭を一定の長さに整える道具である「炭切」などを用いて製品化された炭は、蒟蒻芋と並ぶ収入源として岡崎方面へ出荷されていました。

お茶

額田地区の宮崎地域は茶栽培に適した地域であるといわれ、慶長9年(1640)の夏山村検地帳の「地名」の次に「茶有」の記載が有るなど、古くからお茶を生産してきました。宮崎茶は足助寒茶の流れを汲むものと思われ、採取した枝葉を蒸した後に天日で乾かす、淹し茶、煎じ茶という類のお茶です。各イエでは普段飲むお茶は自分のイエで栽培しており、年2回の総寄合いにはお茶当番という役があったり、石原町の石座神社の祭礼の際にもお茶当番があるなど、お茶は普段の暮らしやハレの時に大きな役割を果たしていました。



図6-74 千万町棚田

千万町棚田

額田地域は水系と地質的側面から、南部と北部で生業の形態に違いが現れています。基本的に南部地域の男川水系はV字谷が多く、耕地を確保するために山の斜面を利用する棚田が選択され、さらに地域で産出される領家変成岩類を利用することで石垣棚田が形成されています。一方北部地域にあたる乙川水系では谷底平野が広いために斜面に棚田を形成する必要性が少なく、また花崗岩類が広く分布しています。

南部地域、男川沿いの地域における棚田のうち、千万町棚田は棚田地域振興法のもと指定棚田地域の指定を受け、「岡崎市ぬかたブランド協議会」により棚田の保全と棚田を核とした地域振興が図られています。



図6-75 万足平の猪垣

ヤマの暮らし

額田地区では、暮らしの糧を得る生業として林業、炭焼き、茶生産が大きな比重を占めていました。

林業は植林が盛んになった明治以降、生業として盛んになります。木材の伐採は秋から冬にかけて行われ、伐採した材木は山から落として川堰したところへ入れ、増水すると堰を切って川に流しました。流れた材木は大平町で上げられました。戦後になるとキンマ（木馬）による木材の運び出しが行われるようになり、昭和30年代までこのキンマが活躍します。伐採した材木は許可制のキンマで運び出すか、用材をコテイ（雄牛）に引かせるツチズリ（土擦り）で運び出しました。ヤマ仕事の際には木挽鋸こびきのこと呼ばれる大型で幅の広い縦挽鋸や、チェーンソーなどの道具が用いられました。

ヤマは種類ごとに雑木ヤマ、炭焼きヤマ、マッタケヤマなどと区別され、多くの恵みをもたらしてきました。マッタケヤマはマッタケシーズンになるとヤマドメ（山留め）となり、ヤマ仕事に入ることを遠慮したといいます。マッタケヤマにおける収入はムラの組織維持や祭礼の存続に貢献しました。

このようにヤマの存在と暮らしが大きく関わる額田地区には、そうした風土の中で生み出され、今に伝承されている特色ある祭礼行事や、生業を支えた道具の数々が存在しています。生業を支えた道具については、旧大雨河小学校に一部が保管されています。

歴史文化の特徴 暮らしに息づく祈りと伝統
六ツ美地区の稲作儀礼

六ツ美地区は原始より矢作川の氾濫原にあたり、肥沃な土地として農業が盛んに行われてきましたが、同時に人々の暮らしは洪水との戦いでもありました。そこで、耕地への導水のために慶長 8 年（1603）に占部用水を、昭和 33 年（1958）には高橋用水を引き、明治 33 年（1900）から大正 4 年（1915）にかけて耕地整理事業を行い、六ツ美地区の収穫高は向上を果たすこととなりました。肥沃な耕地と灌漑技術の発展などを背景に、この地域特有の農耕に関係する祭礼行事や稲作儀礼が今に受け継がれています。



図 6－76 堤通手永御田扇祭り

御田扇祭り

御田扇祭りは、近世岡崎藩の農民支配制度である手永制度のもと、藩領である手永内で行われてきた五穀豊穡を祈る祭りです。

史料によれば宝暦 6 年（1756）にはその存在が認められ、当時は手永から手永へと御田扇が巡行する形態でした。明和 6 年(1769)に本多忠肅^{ただとし}が藩主となると手永は 6 つに区分され、大庄屋の居村を発着地として各手永内で巡村が完結する形をとるようになります。後本多家藩主時代には祭りと伊勢信仰が藩主導のもと結びつけられ、農民支配制度の中で虫送りや伊勢御師の廻壇配札^{かいだんはいさつ}行為的性格を帯びる民俗行事となり、旧暦 6 月に約 20 日前後かけて手永内の村々を神輿巡行するようになりました。明治時代には 1 年に 1 町ずつ神輿を渡御行列により巡行する形態へと変化し、現在に至ります。

現在も神輿渡御を継承しているのは堤通手永と、山方手永の 2 手永で、堤通手永は 20 町(うち 4 町は西尾市)、山方手永は 13 町(うち 1 町は額田郡幸田町)で構成されています。

堤通手永			山方手永		
1	中之郷	中之郷神社	1	井内	八幡宮
2	上青野	榊宮神明宮	2	下和田	犬尾神社
3	高橋	神明社	3	国正	稻荷社
4	上合欽木	神明社	4	正名	占部川神社
5	下合欽木	神明社	5	永野◆	永野神社
6	高落★	神明社	6	定国	素盞鳴神社
7	新村★	神明社	7	中村	占部天神社
8	西浅井★	白山神社	8	坂左右	神明社
9	東浅井★	社宮司社	9	野畑	鉾神社
10	安藤	鉾神社	10	若松	春日神社
11	福桶	三宮神社	11	針崎	御鉾神社
12	下三ツ木	三社神明社	12	柱	綿積神社
13	上三ツ木	神明社	13	羽根	稻荷神社
14	下青野	榊宮神明社			
15	在家	神明社			
16	土井	社宮司社			
17	牧御堂	薬師堂			
18	法性寺	五社神明宮			
19	宮地町	犬頭神社			
20	赤渋	御鉾神社			

★：西尾市 ◆：幸田町
図 6－77 御田扇祭り関係神社一覧

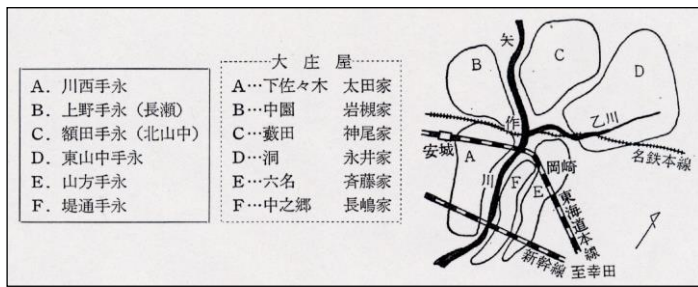


図6-78 六手永範囲と大庄屋

六手永範囲と大庄屋

手永制度は大庄屋制度ともいわれ、大庄屋に各手永内の村々を支配させた制度であり、全国的にも導入した藩は希少です。



図6-79 堤通手永御田扇祭り

堤通手永御田扇祭り

毎年7月20日前後の日曜日に行われています。神輿などを送る側の町の神社で神事を執り行うことから始まり、その後渡御行列が出発します。行列の最中には藩、町、人が繁栄するように願う祝歌が歌われ、青々とした稲の繁る田園地帯を幟や紅白の扇、花傘を持った人々が練り歩く様には、豊作を願う人々の思いが表れています。

大嘗祭悠紀斎田(田植唄、踊り、用具、装束一式)

大正4年(1915)の大正天皇即位の大嘗祭では、悠紀斎田に六ツ美村中島の4反歩(約3,960㎡)、主基斎田に香川県山田村(現・香川県綾歌郡綾川町)が選ばれました。斎田地として選ばれた背景には耕地整理が完了していたこと、用排水路が整備されていたこと、交通の便がよいことがあったといわれています。大嘗祭に新米を供納した後も、これを記念して毎年6月第1日曜日に悠紀斎田お田植えまつりとして、お田植えまつりの神事、お田植踊りが長年にわたり保存・伝承されてきました。昭和41年(1966)には大嘗祭悠紀斎田(田植唄、踊り、用具、装束一式)が岡崎市指定無形民俗文化財に指定されました。



図6-80 お田植えまつり

お田植えまつり

大嘗祭の終了後も斎田奉耕者やその子孫、村民有志等によって斎田地は保存され、田植唄を歌いながら踊り、昔ながらの装束・農具を使って苗を植え、その年の豊作を祈願する「お田植えまつり」として続けられています。



図6-81 お田植踊り

お田植踊り

お田植唄に合わせて、地元婦人会や小学校女子児童によるお田植踊りが披露されます。お田植唄の拍子に合わせて斎田周辺を早乙女が踊りながら練り歩き、実際に苗が植えられていく風景は、大正時代から受け継がれてきたものです。

歴史文化の特徴 くらしに息づく祈りと伝統

岡崎が育んだ伝統産業

交通と物流の要衝として栄えた岡崎では、古くから様々な産業が花開き、現在に受け継がれています。八丁味噌、岡崎の石製品、三河花火、三州岡崎和蠟燭などの産業の数々はいずれも岡崎の特異な歴史的背景や地勢などに影響を受け栄えたものであり、歴史の連なりと豊かな文化を今に伝えています。



図 6 - 82 八丁味噌蔵

岡崎が育んだ伝統産業

八丁味噌製造

江戸時代の矢作川左岸沿いの八町村（現八帖町）で醸造された独特の風味を持つ豆味噌は、「八丁味噌」と呼ばれ、現在に至るまで岡崎を代表する名産として親しまれてきました。大豆そのものを麴化して塩と水だけを加えて熟成させる豆味噌は三河・尾張地方特有のものですが、江戸時代初期より、八町村の2軒の老舗が製造販売をする「八丁味噌」はとくに有名となり、地元周辺のみでなく江戸にも多く積み出され、その名を高らしめました。両家の家伝によれば始まりを戦国期あるいは室町時代初期までさかのぼるとされ、史料によれば両家が問屋としての製造販売を元禄期ごろから行っていた事が明らかとなっており、現在も両家は八帖町で、「カクキュー」、「まるや」の屋号で昔ながらの製法を受け継ぎ、八丁味噌の製造を続けています。



図 6 - 83 石製品

岡崎の石製品

田中吉政が城郭整備等の折に大坂から大勢の石工を呼び寄せ、地元の花崗石で石垣を作らせたという説がある岡崎の石工たちは、八軒町と裏町（現花崗町、別名石屋町）に居住し石製品を作り生計を立て、技術を受け継いできました。連綿と受け継がれてきた技術は現在の岡崎の石材加工業に活かされています。今もこの場所には石材店や鍛冶屋等が建ち並んでいます。

三河仏壇製造

三河仏壇は元禄 17 年(1704)に、矢作川から運ばれる木材と三河北部の漆を材料として仏壇師が製造したのが始まりといわれています。三河仏壇は八職と称する専門職(木地師、宮殿師、彫刻師、鏝金具師、塗師、蒔絵師、箔押し師、組立師)の合作により製造されます。寺院の内陣の豪華さを家庭用仏壇に採り入れているのが特徴とされ、その技術は山車製作にも活かされています。

花火製造



図 6-84 花火

家康公に仕えた稲富伊賀守直家が鉄砲隊の指導者として砲術・火術(稲富流火術)を伝え、これを弟子の沢田四郎右衛門が平和のための火術として改良を重ね、大筒、手筒による打上げ花火の製作に応用し、現在の三河花火の基を作ったといわれています。文化5年(1822)、これらの大筒、手筒花火は菅生神社で五穀豊穡を願う農民により神への奉納とされ始め、現在の天王祭りに受け継がれています。

やはぎの矢作り

明治3年(1870)、静岡県三ヶ日で矢師となった初代^{こやまからく}小山嘉六に始まり、伝統的な手法で竹矢の製造に取り組んできました。70もの製造工程を持つため完成までに2年の歳月を要するといわれ、現在は流鏑馬^{やぶさめ}神事を始めとした各神事で使用されています。昔ながらの製法を守る矢師は全国でも10名程度となりましたが、その内3名が岡崎市に残る1軒に勤め、竹矢づくりの技法を後世に伝承し続けています。

五月武者絵幟作り

かなめ染め武者絵幟は、江戸時代中期に職人の町・三河国土呂(福岡町)の地で誕生しました。製造工程としては、綿布地に下絵を描き、糊付けした後に染色して押さえ、糊を落として乾燥させてから上絵付けをします。豊かな河川と三河木綿が手に入る岡崎の地で発展したかなめ本染めは、今なお熟練の職人により全て手づくりされ、下絵も含め変わることなく受け継がれています。

ちゃらぼこ太鼓作り

ちゃらぼこ太鼓は、この地方独特の祭り囃子で演奏される太鼓のことです。名前の由来は太鼓のリズムから来ており、諸説ありますが蒲郡等の海沿いの地域では南の海から、岡崎市・安城市辺りでは東海道から京都のものが伝えられたとされています。今では製作できるのは全国でも2軒のみで、そのうちの1軒が慶応元年(1865)に創業してから今日までの150年余り、岡崎城下で製作を続けています。

しめ縄作り

しめ縄には神聖な境・領域を他と区別し、汚れを清め、災い等の侵入を防ぐという意味があり、わらをなつた縄に縁起が良いとされる飾り物を付けます。大門におけるしめ縄の生産は、明治20年(1887)代前半、伊勢神宮へ参拝した石川米吉が神宮のしめ縄を参考に開発したことに始まるとされ、生活様式の変化により従来に比べ生産量の減少は否めないものの、手づくり、本物志向により注目されています。

三州岡崎和蠟燭作り

ハゼの木の実からとれる「木蠟」を原料に製造される和蠟燭(木蠟燭)は、江戸時代に入ると需要が高まり、各藩の重要な産業として各地に蠟燭問屋ができました。和蠟燭の製法が本市へ伝えられたのもその頃(17世紀後半)といわれており、現在、和蠟燭の製造は全国で20軒ほどとなりましたが、本市では2軒が営業をしています。「あかり」として仏事を始め寺院・茶道・記念行事など幅広い用途に用いられ、根強い需要があります。

(2) 関連文化財群

 関連文化財群 矢作川と人々の暮らし

矢作川は西三河を貫流する一級河川であり、三河の国名は「御河」と呼ばれた矢作川に由来するとされるほど、三河地域の歴史と深い関係を持っています。河川敷から多量の遺物が出土する全国的にも稀有な河床遺跡として知られ、また、水の流れが形成した自然堤防上には集落が生まれ、古墳や古代寺院が築かれるなど、岡崎地域の歴史と文化が花開く重要な舞台となりました。関連文化財群として位置付ける事で、岡崎のあけぼのの様相を解明し、原始古代の人々の営みを広く伝えます。

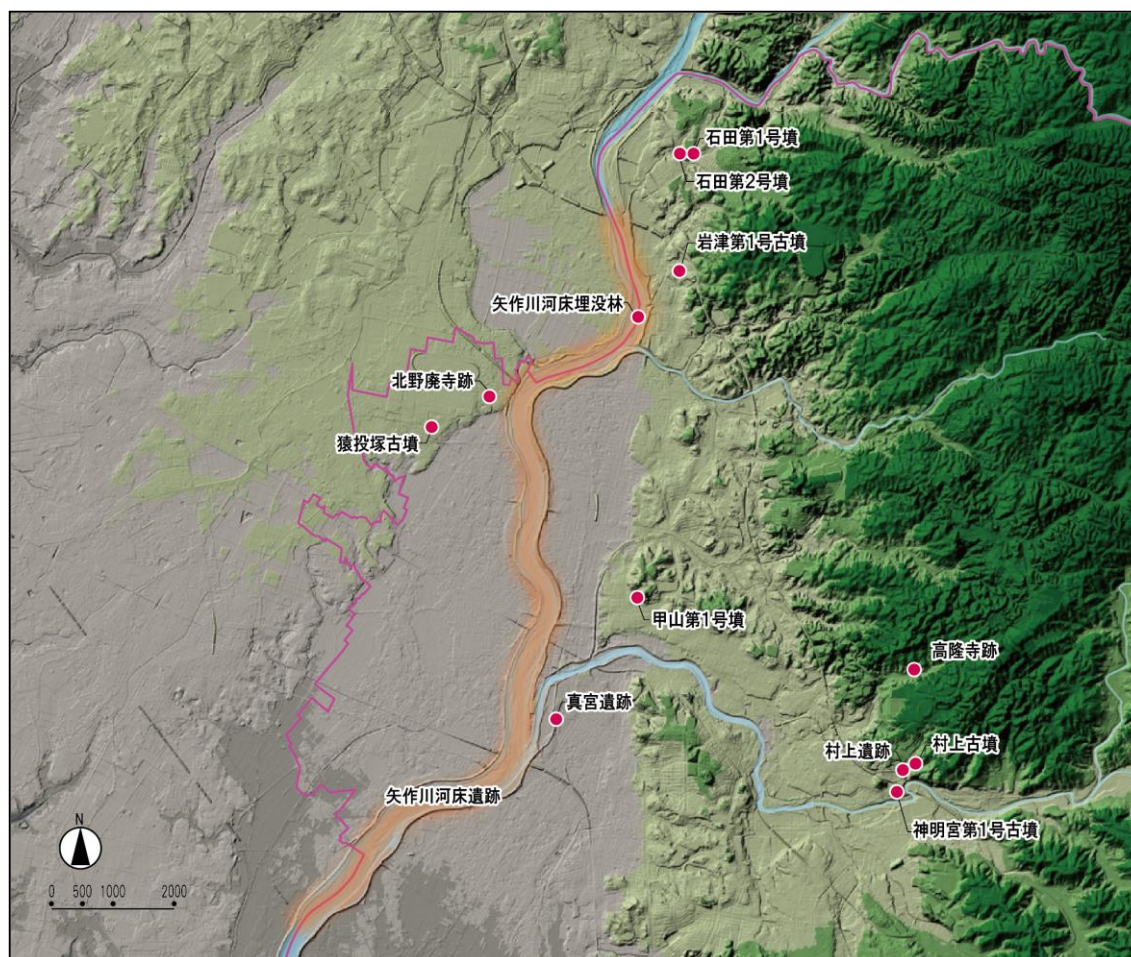


図6—85 関連文化財群「矢作川と人々の暮らし」分布図

歴史文化資産	テーマとの関連性
真宮遺跡	縄文時代晩期前葉・中葉の集落を主体とした遺跡。人々の暮らしが早くから矢作川流域で営まれていたことを示す。
矢作川河床遺跡	矢作川では縄文時代草創期から中・近世までの遺物が大量に採取される。
矢作川河床埋没林	矢作川河床より発見された縄文時代晩期の落葉広葉樹林からなる埋没林。当時の環境を今に伝える。

北野廃寺跡	矢作川右岸に位置する西三河最古の寺院跡。白鳳期の遺物が出土。
岩津第1号古墳	6基で構成される岩津古墳群中の1基で直径18m程度と推定される円墳。全長10mの大型の横穴石室には三河随一の豊富な装飾須恵器や耳環・玉類といった装身具などが副葬され、追葬と考えられる3体分の人骨を確認。
神明宮第1号古墳	直径約19mの円墳で墳頂部に葺石が見られる。複室の横穴石室は全長約11.6m、高さ約2.9mで三河で最大級の規模。
高隆寺跡	天台宗延暦寺の末寺で、寺伝では草創を聖徳太子の開創、行基の中興、弘法大師の開基と様々に伝えられている。弘治元年（1555）焼失。
甲山第1号墳	造築年代は4世紀末～5世紀初頭と考えられ、円筒埴輪が採集されている。
石田第1号墳	直径約20mの円墳で、全長約8mの複室からなる横穴式石室をもつ。石室内から須恵器と耳環一対が出土し、須恵器は6世紀末期にあたる。
石田第2号墳	現状直径約23mの円墳で、全長約9mの複室からなる横穴石室をもつ。また、外護列石 ^{がいごれっせき} が一部残存している。
村上遺跡	縄文時代早期～晩期にかけての集落跡。市内で戦後初に発掘調査された遺跡で竪穴建物跡等が発掘された。
村上古墳	村上遺跡の上面にあたる古墳。直径約17mの円墳で、全長約8.95mの複室の横穴式石室をもつ。
猿投塚古墳	橋目荒子古墳群の中で唯一残存する古墳。直径約20mの円墳。発掘調査は行われていないが、古墳時代中期と推定される。
岩津第1号古墳出土品	約100点の出土品からなる。その中でも装飾須恵器群、飛禽鏡 ^{ひきんきょう} 、環頭太刀柄頭は三河地方での出土が限定され、三葉文環頭太刀柄頭は全国でも出土例が少ない貴重な資料である。
亀山第2号古墳出土遺物	亀山第2号墳は5基で構成される亀山古墳群中の1基。須恵器、土師器、鉄刀、馬具、画文帯神獸鏡などが出土。



関連文化財群 滝山寺と滝山寺鬼祭り

滝山寺所蔵の『滝山寺縁起』は、平安末期から鎌倉期の三河地方の政治・社会・文化史に関わる史実についての貴重な証言が数多く含まれ、中世前期のこの地方の歴史を解明する上で欠かせない資料となっています。三河の中世前期の歴史を埋め、豊かな歴史像を浮かび上がらせる滝山寺伝来の品々と、滝山寺において行われる勇壮な火祭りを関連文化財群に設定し、保存と活用の両輪による保護を図ります。

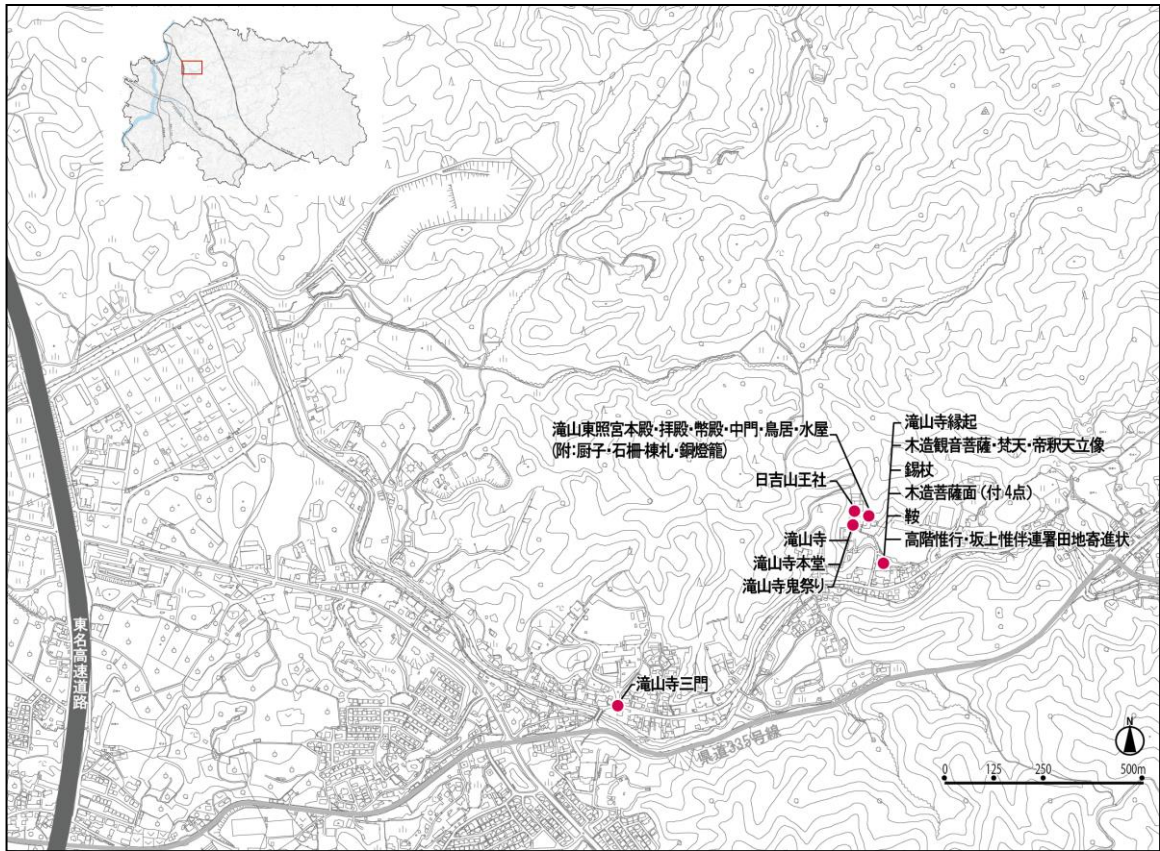


図 6－86 関連文化財群「滝山寺と滝山寺鬼祭り」分布図

歴史文化資産	テーマとの関連性
滝山寺	天台宗の地方中核寺院として発展し、承久の乱後は足利氏が檀越として関わるようになり最盛期を迎えた。源氏や足利氏との関わりが深く、近世には徳川將軍家から朱印地を安堵された。
滝山寺本堂	桁行五間、梁間五間の寄棟造で、屋根は檜皮葺、内陣には禅宗様の大型厨子を置き、本尊を安置しており、様式的には南北朝頃の建築と考えられる。
滝山寺三門	鎌倉時代の仁王門。3間1戸楼門、屋根は入母屋造こけら葺。斗組は下層が三手先、上層が尾垂木付三手先の典型的な中世楼門で、ほとんど純和様で造られているが、わずかに上層部の頭貫木鼻に天竺様の影響を認めることができる。現在の仁王門は文永4年(1267)に建てられた、市内最古の建造物。

滝山東照宮本殿・拝殿・幣殿・中門・鳥居・水屋（附：厨子・石柵・棟札・銅燈籠）	三代将軍家光の造宮。滝山寺本堂の東、やや小高い敷地に南向きに建っており、入母屋造で銅瓦葺、中門は一間一戸の小さな平唐門となっている。東照宮の絢爛豪華な極彩色が施され、江戸初期の様式がよく表現されている。
日吉山王社	滝山寺が天台宗寺院として開かれてまもなく守護神として勧請され、以降数度にわたり再建されてきた。
滝山寺鬼祭り	天下泰平・五穀豊穰を祈る祭礼。祭りの行事として①行列、②仏前法要、③鬼塚供養、④庭祭り、⑤火祭りが行われる。
滝山寺縁起	滝山寺の由緒・来歴を記した書物。成立時期は14世紀初頭、編著者は滝山寺の僧侶とみられ、鎌倉時代の西三河地域の歴史を知る上で貴重な史料。
木造観音菩薩・梵天・帝釈天立像	鎌倉初期、仏師運慶・湛慶の作といわれる。源頼朝の従兄である僧寛伝の縁で頼朝の齒と鬢を納めたと滝山寺縁起に記されている。
錫杖	鎌倉時代、室町時代製作の銅鑄製錫杖。錫杖は杖頭部、木柄部、石突の3部からなるが、本品は杖頭部のみが残ったもの。
木造菩薩面（付4点）	鎌倉時代の行道面。この菩薩面がそれにあたるかは不明であるが、「滝山寺縁起」には天福元年（1233）に足利義氏が迎講菩薩装束12具を滝山寺に寄進したことが記されている。
鞍	寺伝によると源頼朝による寄進である、鎌倉時代の鞍。
高階 惟行・坂上 惟伴 たかしな これ ゆき さかのうえ これ とも れんしょうでんちきしんじょう 連署田地寄進状	嘉禄2年（1227）4月、三河国守護、額田郡地頭足利義氏の被官坂上（大谷惟伴）・左衛門少尉高階（大平惟行）が連署して、滝山寺内惣持禅院に修正会等の料田として阿知波郷の田8反を寄進した文書。足利氏の三河支配の実情を示す貴重な資料となっている。
太刀 銘長光 附糸巻太刀拵	作者の長光は備前国長船派の鎌倉後期を代表する名工。正保3年（1646）9月17日、東照宮本殿の正遷宮の際に徳川家光が奉納したもので、鞘の糸巻太刀拵は、奉納時の江戸時代前期の作品。
太刀 銘正恒 附糸巻太刀拵	作者の正恒は、鎌倉時代初期の備中国古青江派の刀工。この太刀には古青江の特徴が顕著にあらわれており、正保3年（1646）9月17日、東照宮本殿の正遷宮の際に徳川家綱が奉納したもので、鞘の糸巻太刀拵は、奉納時の江戸時代前期の作品。



関連文化財群 家康公生誕の地岡崎

徳川家康公生誕の地である岡崎では、祖父家康公への崇敬が特に厚かった家光が江戸幕府 3 代将軍になり、「寛永の大造営」といわれる大規模な社寺の造営工事を行ったことを機に、家康公の威徳を偲ぶ顕彰活動が連綿と行われてきました。生誕地として本市に受け継がれる思いや誇り、信仰、歴史と文化は、岡崎を語る上で欠くことができない要素です。家康公や徳川家ゆかりの社寺と生誕の地として脈々と受け継がれる顕彰活動を通して、郷土の偉人徳川家康公にまつわる歴史と文化を辿ります。

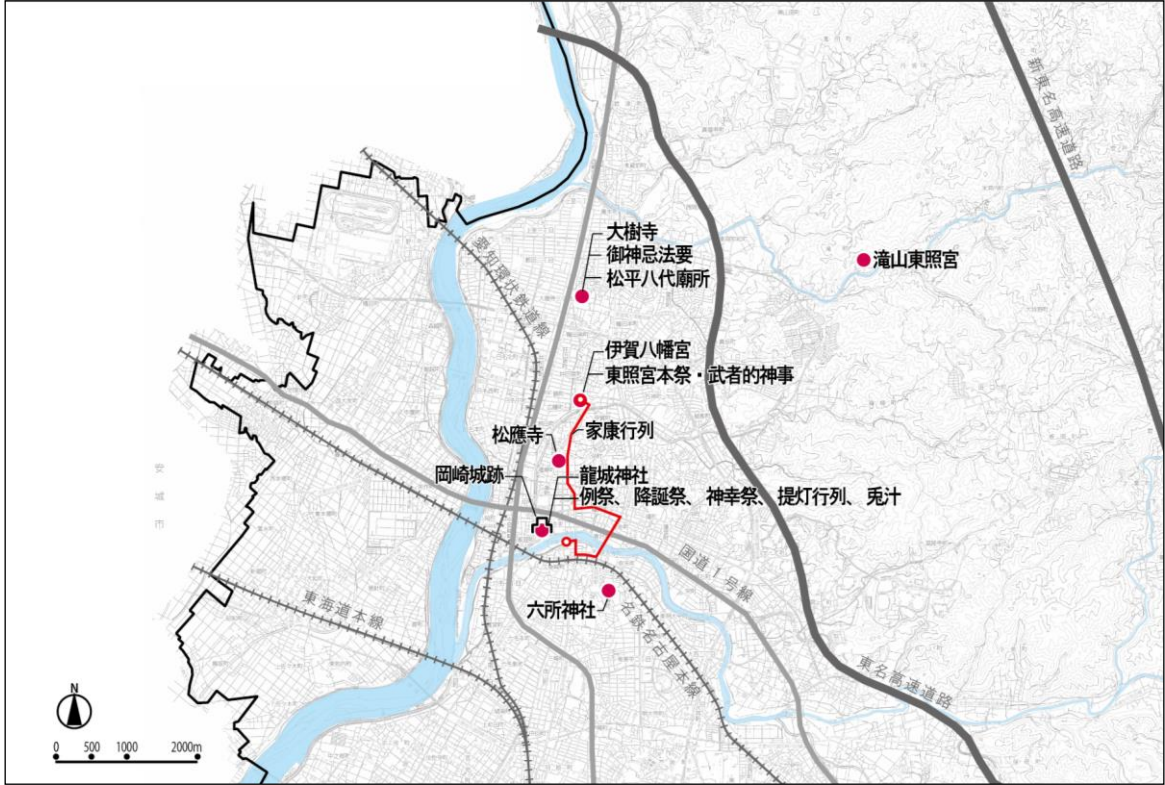


図 6 - 87 関連文化財群「家康公生誕の地岡崎」分布図

歴史文化資産	テーマとの関連性
岡崎城跡	家康公の生誕城。天正期に入り軍事的脅威にさらされるようになると、岡崎城は要害としての改修が行われた。その後豊臣秀吉の武将田中吉政や、歴代藩主の手により城郭や城下町が形作られていく。
大樹寺	元和 2 年（1616）の家康公の遺言で以後歴代の将軍の位牌所とされ、14 代までの将軍の位牌が納められた。3 代将軍家光は家康公 17 回忌の寛永 15 年に大造営を命じた。
伊賀八幡宮	永禄 9 年（1566）に徳川家康公が社殿を造営し、神殿の戸帳に姓名を自署して献納した。寛永 13 年（1636）に 3 代将軍家光による社殿の大造営が行われ、以後も幕府の手で補修が行われた。

六所神社	由緒書によると天文 11 年（1542）の家康公誕生の折に産土神 ^{うぶすなかみ} として拝礼があったという。慶長 7 年（1602）に家康公による社殿造営が行われ、寛永 11 年（1634）の 3 代将軍家光による社殿の改築以後も幕府の手で修復が行われた。
松應寺	慶長 17 年（1612）に大坂へ進軍途中の家康公が参詣し、寛永 10 年（1633）には 3 代将軍家光による大造営が行われた。慶應 3 年（1867）に 14 代将軍家茂が参詣している。
滝山東照宮	3 代将軍家光により造営された。家光が長光の太刀と黒毛の馬を、家綱が正恒の太刀と馬資金を寄進し、久能山、日光とあわせ日本三東照宮として幕府から厚い庇護を受けた。
龍城神社	徳川家康公と本多忠勝を合祀する神社。家康公が岡崎城二の丸坂谷の産屋で出生したため、寛永年間の藩主本多忠利が本丸内に東照宮を奉祀した。明和 7 年（1874）本多忠肅が岡崎藩主となった際、自由参拝できるようにと本丸内にあった東照宮を三の丸に移した。明治維新後現在の位置へ移転された。
家康行列	岡崎の春の桜まつりの期間中に行われる武者行列。もとは後本多藩祖本多忠勝を祀る映世神社の例祭に、藩主を先頭として行われた行軍の儀式。
御神忌法要	大樹寺の年中行事として、家康公が亡くなられて以降毎年命日に檀信徒や地域住民が本堂に参列し、家康公の威徳を称える法要。
松平八代廟所	大樹寺創建の際に松平親忠が先祖の墓を移し、家康公が父広忠までの墓を建て再整備した松平八代の廟所。
東照宮本祭・武者的神事	伊賀八幡宮の年中行事として、家康公が亡くなられて以降毎年命日に「東照宮本祭」が行われている。また、伊賀八幡宮では江戸幕府ゆかりの神事として「武者的神事」が今も受け継がれている。300 年以上続く行事で、当初は武運を祈る占いであったものが豊凶を占うものになった。
例祭、降誕祭、神幸祭、提灯行列、兎汁	龍城神社の年中行事として、家康公が亡くなられて以降毎年命日に「例祭」、生誕日に「降誕祭」、4 月第一日曜に「神幸祭」が行われている。神幸祭は現在の家康行列の起源とされ、神輿は大名行列の古礼をもって岡崎市中を渡御巡行する。家康公の伝説にちなんだ兎汁が毎年元旦に振る舞われている。



関連文化財群 東海道に息づく歴史文化

岡崎の発展と東海道は深い関わりを持っています。人や物を運ぶ交通の大動脈は、文化や信仰が行き交う道でもありました。岡崎城下に引き込まれて後、二十七曲りと呼ばれる屈曲の多い様相を呈することになった東海道は、岡崎の経済を支えるのみならず、様々な信仰や文化を育む土壌としても機能し、本市の豊かな歴史文化の環境を作り出す一因となりました。また、東海道沿いには、宿場町や城下町の風情を伝える建造物や、近代に入ってからにはモダンな建造物が立ち並び、それらの建物は戦災を潜り抜け、現在もまちのシンボルとして人々に愛されています。風情あるまちなみを舞台として、道が繋いだ信仰や祭礼が今も各地に息づいています。

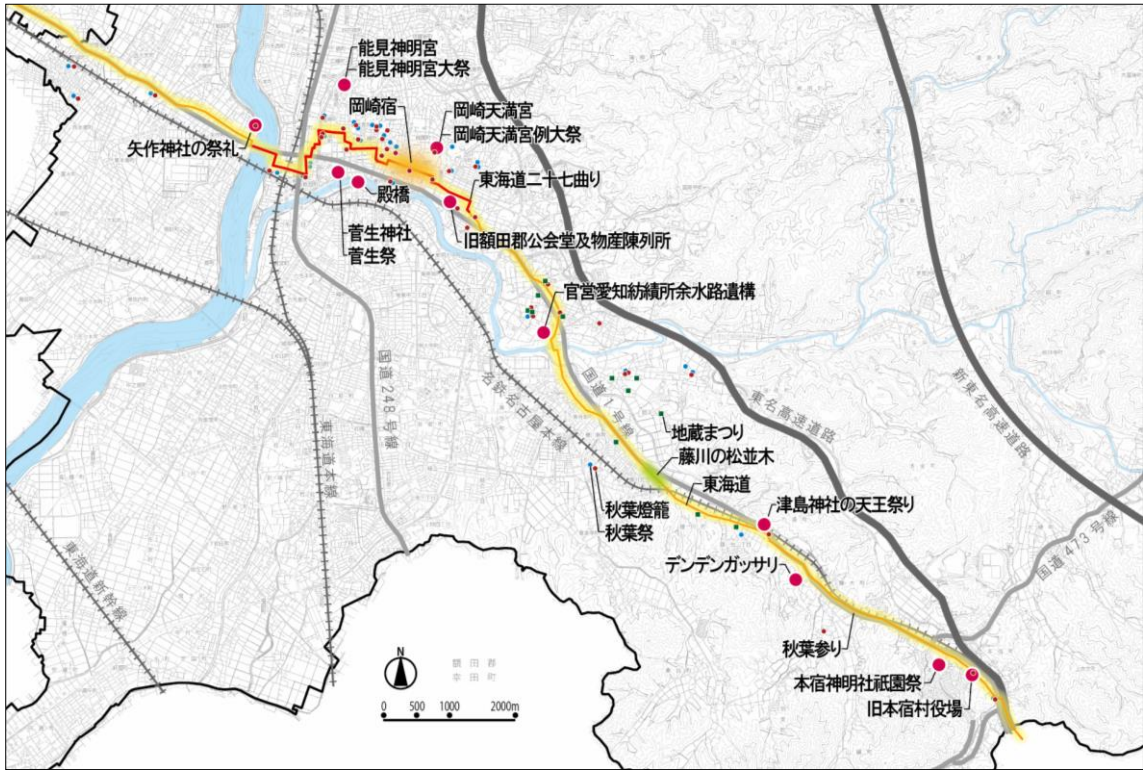


図 6－88 関連文化財群「東海道に息づく歴史文化」分布図

歴史文化資産	テーマとの関連性
東海道	市の中心部を含み延長約 20 km と市域を南東から北西に貫いている。中世より東西交通の要衝として宿が置かれて大いに賑わいを見せ、近世には城下町、宿場町、門前町が発達した。
東海道二十七曲り	岡崎城下を通る東海道は屈曲の多さで知られ、「二十七曲り」と呼ばれている。江戸時代半ばの紀行文にも「二十七曲り」の用語が見られ、岡崎のまちの特色を示す景観として親しまれていた。
岡崎宿	江戸時代の東海道宿駅。岡崎城下町で三河国の水陸交通の要衝に位置し、宿制創設の当初から繁栄した宿場だった。

菅生神社	岡崎城主松平信貞が境内に 12 末社を勧請し、永禄 9 年（1566）に徳川家康が社殿を再建した。岡崎城内殿橋東側の地に移転し、岡崎城主代々の崇敬を受け、度々城主による社殿の修復が行われた。社殿は戦災で焼失し、その後再建され現在に至る。
岡崎天満宮	中町に位置し、 ^{みちのおみのみこと} 道臣命・菅原道真を祭神とする。元は総持尼寺の鬼門除けとして道臣命を勧請し、古くは北野天神、弓弦天神、伴天神と称した。元禄 3 年（1690）、菅原道真公を合祀して岡崎天満宮に改めた。そして東海道岡崎宿の総鎮守として崇敬を受けた。社殿は戦災で焼失したがその後再建された。
能見神明宮	伝承によると材木町にあった ^{いなさき} 稲前神社を天正 18 年（1590）に岡崎城主となった田中吉政が城地拡大に伴いこの地に移転再興したといわれている。寛延 2 年（1749）に社殿が再建、明治 42 年（1909）に拝殿が改築され、大正 13 年（1924）に神殿、神楽殿、石鳥居等が建立されている。
菅生祭	氏子衆による練り込み行列や船魂祭、鉾船神事の後、神前で奉納手筒花火が行われる。現在は岡崎観光夏祭りの花火大会と合同開催されている。
岡崎天満宮例大祭	城下町の大半を占める氏子により祭礼が盛大に行われ、大花火の奉納は岡崎の名物であった。花火奉納が民家の密集により廃止された後は、規模を縮小して天満宮で上げられている。
能見神明宮大祭	能見神明宮大祭の起源は少なくとも江戸時代中期にさかのぼる。幕末には材木町東部の氏子が中心になって山車や花笠を祭りに用いるようになり、明治 33 年（1900）の神輿曳き廻しを経て現在の祭りの形へと変わってきた。勇壮な山車の曳き廻しと平安絵巻のような御神輿渡御が大祭の象徴的行事であり、祭りのクライマックス「山車宮入り」の奉納の舞を経て祭りは最高潮に達する。
秋葉参り	江戸時代から現代に至る信仰行為で、火防の神として有名な遠州秋葉山への参詣旅行。岡崎では秋葉信仰が浸透した寛政期以降に盛んになった。
秋葉燈籠	江戸時代、火難防除のため、防火の神である秋葉権現に祈願して町や村に建てられた常夜燈。
秋葉祭	東海道を中心に広がっている秋葉信仰の祭礼。各町内会や講で年に一度、年行司等の代表者が代参し受けてきた御札を秋葉山常夜燈や秋葉社に納める。町の人々が集まり僧侶・神主の祈祷を受けるものと、寺院の秋葉堂において秋葉山大祭として三尺坊命日にあたる 11 月 16 日又はその前後に祈祷や火渡りを行うものがある。

本宿神明社祇園祭	今から 250 年ほど前、本宿村や近村で伝染病が流行した時、牛頭天王を祀っていた立場（東町）では病人が無く牛頭天王のおかげだという噂が広まり、本宿村中心の西木竹に社を建て祀るようになったことが起源とされる。古くからの祭礼に高張提灯、十二張 2 本、梵天（花笠）行列、山車渡御を加え発展させながら祭りが今に伝えられている。
デンデンガッサリ	毎年正月 3 日に山中八幡宮の御田植祭として行われ、その年の稲作の豊作を予祝するために田作りの過程を模倣的に演技する「田遊び」。
津島神社の天王祭り	藤川町、市場町で夏病み防止と虫送りのために行われる祭り（通称「ちょうちんまつり」）。例祭当夜には神輿渡御の行列の前後に高張、十二張の竿燈が加わり、東海道を厳かに巡行する。
地蔵まつり	地蔵まつりは「地蔵盆」「地蔵会」とも呼ばれ、地蔵菩薩の縁日である旧暦 7 月 24 日辺りに信徒らが地蔵に供物・灯明を供え、仏名を唱えたりする行事。地蔵まつりの信仰は、江戸時代前期に複数の記録がある京都および近畿地方で盛んであったものが東海道を通じて広がったとみられる。道祖神信仰と結びついた路傍や街角のお地蔵さん、いわゆる「辻地蔵」が対象で、子供の幸福を祈る民間信仰である。
矢作神社の祭礼	以前は 7 月中旬に行われた夏祭りで、現在は 10 月 1・2 日が祭礼日である。祇園祭と同様に山車が加わり、いずれの山車も江戸時代後期に作られ、この頃には祭りが始まったと考えられる。
藤川の松並木	旧東海道の両側約 1 km の間にクロマツが立ち並ぶ。昭和 38 年（1963）ごろから藤川の老人クラブや地域のまちづくりを行う有志の手で保護され、最近は藤花荘（障がい者支援施設）利用者の協力で熱心に清掃活動が行われている。
旧額田郡公会堂及物産陳列所	大正 5 年（1916）に岡崎市公会堂となり、昭和 44 年（1969）～平成 22 年（2010）まで岡崎市郷土資料館として利用されてきた。初期の郡単位の公会堂と物産陳列所が揃って残されている点が貴重。
官営愛知紡績所余水路遺構	官営愛知紡績所は明治 14 年（1881）～19 年（1886）、額田郡大平村にあった官営紡績所であり、殖産興業・文明開化の機運のもと洋式機械等を導入し本市紡績業をけん引した。明治 29 年（1896）に工場は焼失したが、焼失を免れた一部施設は引き継がれた。現在は工場の水車の動力系統が点々と残っている。
殿橋	正保 2 年（1645）岡崎藩主本多忠利の代に初めて架橋されたという。明治 15 年（1882）の大水害の後、乙川兩岸堤防が改修された際に殿橋も架け替えられた。現橋は昭和 2 年（1927）に架橋されたもの。
旧本宿村役場	額田郡本宿村の三代目の役場庁舎として昭和 3 年（1928）に竣工。カウンター方式を採用した近代的な役場庁舎の先駆的な存在。



関連文化財群 岡崎が育んだ伝統産業

岡崎の地勢や気候、そして歴史的背景は数々の伝統産業を生み出す素地となりました。六供や小呂で産する花崗岩は小呂石と呼ばれ、石都岡崎と呼ばれる岡崎の石工業の繁栄を導き、二夏二冬の長期熟成により作られる八丁味噌は、古くは戦国時代より武士の携行食として重宝されたとされ、岡崎を代表する名産として多くの人々に愛されています。これらの伝統産業が織りなす歴史と文化の重層性を、関連文化財群に設定します。

歴史文化資産	テーマとの関連性
岡崎の石製品	岡崎の石材は、六供・小呂などから産出された。こうした石材が矢作川の舟運によって各地に販売されていたと考えられている。また、物資の交流が盛んであったことから、他地方の石製品も存在しており、それらを手本として、岡崎の石工が花崗岩を使用して作っているうちに岡崎化と呼べるような変化を遂げたものや、そのままの形を維持しているものがある。
三河仏壇	岡崎には古くから寺院が多く、それとともに宗教用具の生産も発生してきた。仏壇業は 19 世紀初頭には確立していたとみられ、天保年間の材木町の家並図には仏壇師庄八・宇兵衛・源吉・六之助などの名が記録されている。このうち仏壇師庄八は三河仏壇の産地形成に大きな影響を与えたとされている。
八丁味噌	江戸時代の矢作川左岸沿いの岡崎八町村（現八帖町）で醸造された独特の風味を持つ豆味噌で、現在に至るまで岡崎を代表する名産。江戸時代初期より、八町村の早川家と大田家の 2 軒が製造販売する「八丁味噌」はとくに有名となり、地元周辺のみでなく江戸にも多く積み出されその名を高からしめた。
三河花火	江戸時代から続く、三河地方の花火製造と仕掛け・打上げ花火の技術。江戸時代の岡崎の花火の主流であった稲留流を始め、多くの流派が技を競い合い、技術の伝授は秘伝とされた。現在各流派の技を受け継いだ人々により、三河花火はますます盛んになっている。
やはぎの矢作り	明治 3 年(1870)、静岡県三ヶ日で矢師となった初代小山嘉六に始まり、伝統的な手法で竹矢の製造に取り組んできた。70 もの製造工程を持つため完成までに 2 年の歳月を要するといわれ、現在は流鏑馬神事を始めとする各神事で使用されている。
五月武者絵幟	かなめ染め武者絵幟は江戸時代中期に職人の町・三河国土呂(福岡町)で誕生した。製造工程としては、綿布地に下絵を描き、糊付けした後染色して押さえ、糊を落として乾燥させてから上絵付けをする。

ちゃらぼこ太鼓	祭礼時に太鼓・笛などの楽器で囃し、簡単な屋台車と共に村内を練り歩く「囃子」は市内周辺部の多くの地域に存在し、この祭囃子で使用する太鼓のことをちゃらぼこ太鼓と呼ぶ。諸説あるが、蒲郡等の海沿いの地域では南の海から、岡崎市・安城市辺りでは東海道から京都のものが伝えられたとされる。
しめ縄	家庭へのしめ縄の普及によって、しめ縄作りを副業とする農家が現れてきた。大門では各農家でしめ縄作りが盛んに行われている。
三州岡崎和蠟燭	ハゼの木の实からとれる「木蠟」を原料として製造される和蠟燭(木蠟燭)は、江戸時代に入ると需要が高まり、各藩の重要な産業となり各地に蠟燭問屋ができた。和蠟燭の製法が本市へ伝えられたのもその頃(17世紀後半)といわれている。現在では和蠟燭の製造は全国で20軒ほどとなったが、本市では3軒が営業をしており、「あかり」として仏事を始め寺院・茶道・記念行事など幅広い用途に用いられ、根強い需要がある。

3 文化財保存活用区域

歴史文化資産が特定の範囲に集積している場合に、当該資産群をその周辺環境も含めて面的に保存・活用するために設定する区域を「文化財保存活用区域」と呼びます。域内の地域特性や歴史文化に応じて市町村が独自に設定する戦略的な計画区域であり、多様な歴史文化資産が集中する区域を設定して保存・活用を図ることで、魅力的な空間の創出につながることを期待されます。

岡崎市では、歴史文化資産とそれらを取り巻く環境全体を貴重な資産として捉え、岡崎市歴史的風致維持向上計画における重点区域の事業進捗を加味しつつ、将来的に文化財保存活用区域の設定を目指したいと考えています。

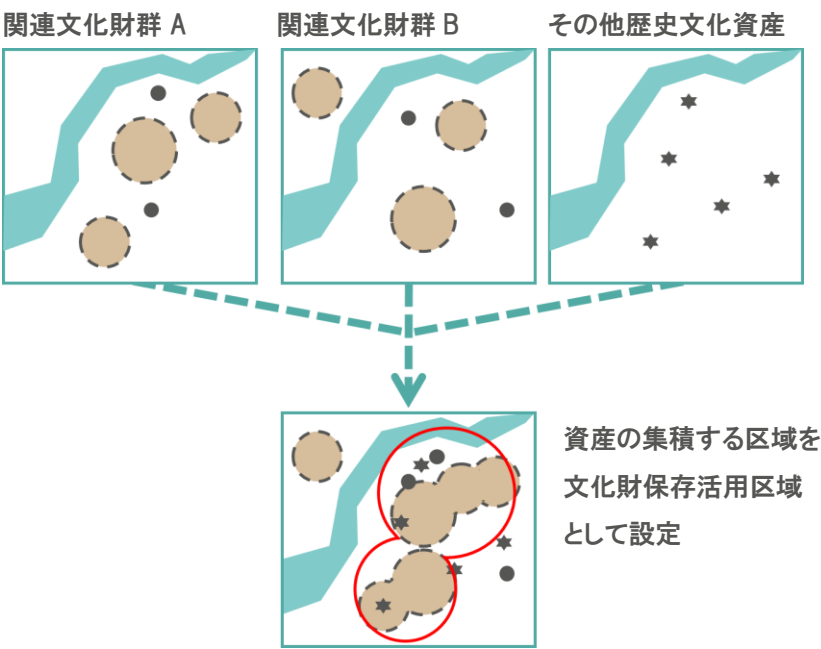


図 6-89 文化財保存活用区域模式図